神がお望みのこととは？

マイケル・S・ハイザー

聖書の引用は特に指定のない限り、日本聖書協会発行『聖書』（口語訳）（1954 および 55 年 改訳）を使用しています。（訳者：テイラー尚子）

原書：*What Does God Want?*
Copyright © 2018 by Michael S. Heiser

ISBN-13: 978-0692199046 (Blind Spot Press)
ISBN-10: 0692199047
All rights reserved.

カバー：モリー・ジョイ・ハイザー

マイケル・S・ハイザーによるその他の著書

Supernatural:What the Bible Teaches about the Unseen World and Why it Matters（日本語版『聖書が語る見えない世界 ー それが重要な理由』）

The Unseen Realm: Recovering the Supernatural Worldview of the Bible

Angels: What the Bible Really Teaches About God's Heavenly Host

Demons: What the Bible Really Teaches About the Powers of Darkness

I Dare You Not to Bore Me with the Bible

The Bible Unfiltered: Approaching Scripture On Its Own Terms

Reversing Hermon: Enoch, the Watchers, and the Forgotten Mission of Jesus Christ

Brief Insights on Mastering Bible Study（「60-Second Scholar」シリーズ）

Brief Insights on Mastering Bible（「60-Second Scholar」シリーズ）

Brief Insights on Mastering Bible Doctrine（「60-Second Scholar」シリーズ）

The Façade（フィクション）

The Porten（フィクション）

聖書の各書の名前の略記（必要に応じて使用）

旧約聖書

創（創世記）
出（出エジプト記）
レビ（レビ記）
民（民数記）
申（申命記）
ヨシュ（ヨシュア記）
士（士師記）
ルツ（ルツ記）
サム上、サム下（サムエル記上、下）
王上、王下（列王記上、下）
代上、代下（歴代誌上、下）
エズ（エズラ記）
ネヘ（ネヘミア記）
エス（エステル記）
ヨブ（ヨブ記）
詩（詩篇）
箴（箴言）
伝（伝道の書）
雑（雑歌）
イザ（イザヤ書）
エレ（エレミア書）
哀（哀歌）
エゼ（エゼキエル書）
ダニ（ダニエル書）
ホセ（ホセヤ書）
ヨエ（ヨエル書）
アモ（アモス書）
オバ（オバデヤ書）
ヨナ（ヨナ書）
ミカ（ミカ書）
ナホ（ナホム書）
ハバ（ハバクク書）
ゼファ（ゼファニヤ書）
ハガ（ハガイ書）
ゼカ（ゼカリヤ書）
マラ（マラキ書）

新約聖書

マタイ（マタイによる福音書）
マルコ（マルコによる福音書）
ルカ（ルカによる福音書）
ヨハネ（ヨハネによる福音書）
使徒（使徒行伝）
ロマ（ローマ人への手紙）
一コリ、二コリ（コリント人への第一、第二の手紙）
ガラ（ガラテア人への手紙）
エペ（エペソ人への手紙）
ピリ（ピリピ人への手紙）
コロ（コロサイ人への手紙）
一テサ、二テサ（テサロニケ人への第一、第二の手紙）
一テモ、二テモ（テモテへの第一、第二の手紙）
テト（テトスへの手紙）
ピレ（ピレモンへの手紙）
ヘブ（ヘブル人への手紙）
ヤコ（ヤコブの手紙）
一ペト、二ペト（ペテロの第一、第二の手紙）
一ヨハ、二ヨハ、三ヨハ（ヨハネの第一、第二、第三の手紙）
ユダ（ユダの手紙）
黙（ヨハネの黙示録）

献辞

イエスに対する信仰の道を歩み始めたばかりの方々、そして信仰生活は長いが、
進歩がないと感じておられる方々へ。

目次

序文

はじめに

第 I 部：物語

第 1 章：神は家族を望まれた

第 2 章：それでも神は家族を望まれた

第 3 章：神はご自身の家族に裏切られた

第 4 章：神が人間の家族に合流された

第 5 章：神が神の家族を追い求める

第 6 章：神は神の家族とともにある

サマリーとプレビュー

第 II 部：福音

第 7 章：福音とは？

第 III 部：イエスに従う

第 8 章：弟子訓練とは？

第 9 章：弟子が行うこと

重要な名前と用語（用語集）

超自然界に関する用語のサマリー

序文 — スキップしないでください

注意を引いたでしょうか。本を読む際の序文は、待ち行列で待機したり、C-Span を見たり、交通渋滞に巻き込まれたりすることに例えることができるのは承知しています。この序文が感動的だとは約束できませんが、重要ではあることは確かです。

本書は、聖書の真の主題についての入門書です。その主題とは、神の愛です。あなたが神とともに生きる永遠の命を持つことを神が望んでおられるということです。さらに、聖書はこれら二点について他の人々も知ることができるようにあなたが彼らを助けることを神が望んでおられるということを語っています。かなり単純ですが... これは通常の概念とは異なるでしょう。本書はありふれた「キリスト教入門」の本ではありません。皆さんがこれまでに聞いたことのないようなことも取り上げています。そのうえ、私は皆さんの馴染みのある見方とは少し異なる観点を持っています。

本書は二種類の読者を想定しています。まず、最近イエスを信じるようになった方です。これに当てはまる方は、おそらく既に聖書に気後れを感じておられることでしょう。聖書には奇妙に聞こえることが沢山書かれており、理解も容易ではありません。お気持ちがよくわかります。私も十代でイエスを信じるようになりましたが、聖書についてはほとんど知りませんでした。イエス、ノア、アダムとエバなどについては聞いていましたが、それだけでした。本書は、私が福音を受け入れたばかりの当時の自分に誰か手渡してくれていたらどれほどよかったかと思う本です。聖書の物語の意味や、とても重要な概念を解明するために役立ったはずです。本書はあなたにも同様に役立つことでしょう。

二番目の種類の読者は、イエスを知ってから一定の時間が経っているが、「行き詰っている」と感じている方です。イエスを信じ、教会でもしばらく（あるいは長年）活動してきました。しかし、これだけではないはずだとずっと感じています。聖書にはこの時点まで学んできたこと以上の意味があるはずだと。イエスに従うということの本当の意味となると、少し戸惑いを感じます。日曜の礼拝に出たり、クリスチャン仲間と付き合ったり、教会の小グループに参加したりといったことだけがイエスに従うことではないはずです。そう感じておられるあなたの直感は正しいのだということを、知っていただきたいと思います。あなたが前に進むために本書を役立ててください。

矛盾するように聞こえるかもしれませんが、本書は、基本的だが重要な観念を賢い方々に紹介する（あるいは紹介しなおす）ことを目指しています。私は、常に読者が賢明であると想定しています。一部の方々にとって、本書はいくつかの事柄を新しい方法で再習得するために役立つでしょう。イエスに従い始めたばかりの方々、私たちはすべてどこかでそれを開始しなければならないのです。皆同様に、この時点に立っています。

本書が、私の他の著書へ読者が進むための準備となるよう願っています。本書を読み終えたら、『*Supernatural: What the Bible Teaches about the Unseen World—And Why It Matters*』（日本語版『*超自然の世界： 聖書が語る見えない世界 ー それが重要な理由*』）に進まれることをお勧めします。この本の英語版はオンラインで Amazon.com または出版社 Lexham Press から入手できます。また、本書に含まれる重要な概念の一部を検討する無料のビデオもオンラインで複数ご覧いただけます。他の言語版は、https://www.miqlat.org/translations-of-supernatural.htm からダウンロードできます。

『*Supernatural*』をお読みになった読者には、私の他の著書へと進んでいただければ嬉しく思います。次の挙げたものは、聖書と神について学ぶことは教会で聞いていることにとどまらないということを語っています。『*I Dare You Not to Bore Me with the Bible*』、『*The Bible Unfiltered: Approaching Scripture on Its Own Terms*』、および『*The Unseen Realm: Recovering the Supernatural Worldview of the Bible*』。

また、私のポッドキャスト『*Naked Bible Podcast*』（“ありのままの聖書”ポッドキャスト）もお聴きいただければ嬉しく思います。このポッドキャストの名前は、聖書の内容を、現代の宗派によるフィルターを通さず、また現代の西洋のパラダイムに基づいた推定を行うことなく、聖書独自の古代のコンテキストでリスナーにお届けするという私の目的を反映しています。私が関心があるのは、とにかく聖書自体のコンテキストで理解した聖書のテキストが支えることのできる内容のみであり、そのテキストについて伝統が言っていることではありません。毎月、数十万人のリスナーが、初めて聖書を読みなおすことを学んでいます。信者は、定期的にこの発見のスリルを味わう必要があります。それが私の活動の理由です。

この序文をお読みくださり、ありがとうございます。

はじめに

神がお望みのこととは？

一見単純な質問ですが、少し考えると、必ずしもそうではありません。

なぜだと思いますか。そうですね。まず、その質問をしている人が誰かを知る必要があります。人はさまざまな理由でこの問いを投げかけます。それは苦しんでいる人からの怒りの叫びである場合も、深い悲しみから出た、ほとんど聞き取れないようなささやきである場合もあるでしょう。動機は好奇心でしょうか。それとも、自分と向かい合い深く考えたいという願望に駆り立てられただけでしょうか。そのような質問の理由によって答えは異なるということは、簡単に理解できます。

問いかけているのは私ですから、それは簡単に明らかにすることができます。しかし、まず、私の動機*ではない*ことについてお話します。答えがわからないからこの質問をしているわけではありません。答えはわかっています。実際、皆さんについての答えもわかっています。それは、私たち全員に対して神ご自身がくださる答えです。私はそれに基づいて質問しています。大切なことについて皆さんに考えていただくためにこの質問をしているのです。「神がお望みのこととは？」と尋ねるとき、実際に尋ねているのは「*人類の一人ひとりの人間に関して、神が何をお望みなのか*」ということです。私と私の人生、あなたとあなたの人生について、神は何をお望みなのでしょうか。

答える前に、これが宗教的な質問であることは明らかですね。神についての質問は、当然そのように分類されます。私がこの質問を提示し、それに答えているのは、神に関心があるからです。ほとんどの人が神には興味を持っていますが、教会には興味がありません。それは構いません。神について語るとき、教会に興味がなければならないわけではありません。

私は牧師でも司祭でもありませんが、聖書の研究を生涯の仕事としています（実際それが可能なのですよ）。
質問しているのは私ですから、聖書的な答えになります。これで焦点を少し絞ることができます。私の目的は、「神が望まれることとは？」という質問に聖書がどのように答えているかを説明することです。
ではお答えします。単純なことです。神は*あなた*を望んでおられます。

驚くかもしれませんね。疑うかもしれませんね。構いません。これが正しい答えなのです。しかし、正直に言うとこれは*十分な*答えではありません。それがどれほど素晴らし

いことなのか、どれほど意味深いことなのか、一つの文章だけでは感じ取ることができません。この一文の背後にどれほどの愛があるのかを理解するには、コンテキストが必要です。この答えの背後には、実際に長い、注目すべき*物語*があるのです。

ですから、本書では神が望まれていることについてだけではなく、*神があなたに知って欲しいとお思いのこと*についても説明します。そうです。神はあなたをお望みです。しかし、それを理解し、神の気持ちと同様な気持ちをあなたが神に対して持つためには、コンテキストが必要です。

もちろん、それが私の仕事です。神の物語から始めましょう。それには多くの悲劇が含まれていますが、あなた（そして私）に対する神の思いを変えるものはありませんでした。物語を語り終わったら（本書全体ではありませんから読書家ではない方でも大丈夫）、特に重要な部分を掘り下げて説明します。物語の部分を読むだけでも、最初に提起した質問の答えがわかると思います。それでも、引き続き読みたくなるでしょう。読んでくださることを願っています。

さて、本題に入る前に一つだけ但し書きがあります。これまで教会で多くの時間を過ごしてきた方は、この物語を既に知っていると思うことでしょう。間違いなく、部分的にはご存知だと思いますが、驚くことは必ずあります。あいにく、この物語のすばらしさを理解することの妨げとなるのは、宗教です。教会や宗派の好みが物語そのものよりも重要になってしまうことがあるのです。ここでは、そういうことはありません。

一部の読者は聖書に慣れ親しんでおられると推定しますが、新しい真実、古い真実の新しい捉え方に遭遇していただけると確信しています。教会に行ったことのない方、聖書についてあまり聞いたことのない方、あなたは本書の理想的な読者です。捨てなければならない知識も、学び直す必要もないからです。すべて新鮮です。どちらにしても、神が何を望まれ、なぜそれを望まれているかを発見する感動を経験できると思います。

第 I 部：物語

第 1 章

神は家族を望まれた

神についての私の当初の考えは、空にいる目に見えないお父さんではありませんでした。神は創造主であり、遠く離れた権威でした。私のことも他の人々のこともご存知だとは想像していましたが、私について、または世界中の他の人々について神がどう考えておられるか（神が考える方であったとしたらの話ですが）は見当もつきませんでした。神がおられることは疑っていませんでした（室内におられる実際の存在とまでは言いませんが）。むしろ、神は私が（困ったときなど）時々その注意を惹くことのある冷静な観察者のような存在でした。神が私に復讐しようとしているとか、私を好きではないとか思っていたわけでなありません。私は神が実在のお方であることを受け入れていました。そして、私としては神が私に敵対的であると考える理由はありませんでした。しかし、それだけのことでした。
ことわざにもあるように、「去る者は日々に疎し」です。

神について学ぶことは沢山ありました。私は特に神を求めてはいなかったので、神も私を求めておられないと思っていました。誰かに尋ねられていたら、神にはもっとやりがいのあることがあると答えていたと思います。私は神の目に留まるようなことは（良きも悪しきも）何もしていないと思っていたと思います。

私は間違っていました。神は私を求めておられたのです。私が知らなかっただけです。今では神が私を求めておられたことを知っています。それは私たちを求めることは神の本質だからです。神は私たちへの*熱意を持っておられます*。

神についてどうしてこのようなことがわかるのでしょうか。（これはこれから何度も尋ねる質問ですから、注意してください。）例えとして、私たち自身を考えることから始めましょう。私たちが自分が作ったものを大切に思うのは、正常（人間の本性の一部）です。特にそれが大変な努力を要した場合や、共同思考の結果である場合にはなおさらのことです。私たちは、*自分*が作ったもの、達成したこと、最初に考えたことなどを誰かに馬鹿にされたり、けなされたり、壊されたり、自分のものだと主張されたりすると、当然腹立たしく感じ憤慨します。そのように感じないほうが異常です。

そう感じるのは、人間としての“デフォルト”（生来の特性）によるものです。私たちは自己認識しています。私たちにはすべて内面生活、つまり精神の生活があります。私たちは、苦しみと損失をもたらすものではなく、私たちが望み、喜びをもたらすものを

知性を持って見分けます。目的もなく無作為に行動するのではなく、意図的な行動をとります。合理性と直感によって導かれています。

このことが的を射ている理由の説明は沢山あります。重要性が極めて低いと思うようなことでも、何等かの理由によって意図的に行われます。虫歯や口臭が望ましくないため、歯を磨きます。職を維持するため（あるいは何か楽しいことをするため）に起床します。右ではなく左に曲がるのも、目的地があるためです。不合理と言われるようなことをする場合（たとえば、ソーシャルメディアで相手がそれを見ることも気にすることもないかもしれないのにその誰かを批判するなど）でも、特定の結果を望むが故という理由（優越感を感じたい、あるいは「教訓を与える」ためなど）があります。そして、何か不快なことを行うときでも、何等かの意味でそれが自分のためになるという考えが働いています。ダイエットするのは他にどんな理由があるというのでしょう。私たちは本来、無目的ではなく、目的を持った存在なのです。

これらのことの反対は、心理的または感情的な異常を示すことになります。

聖書の神もこの側面を共有します。神はご自分が行われたことを*楽しむ*ために行動されます。神は何かが足りなかったために人類を創造されたのではありません。神が不完全だった、あるいは仲間が必要だったとでもいうように、孤独であったわけでもありません。神が必要とされるものはないのです。それは... . というと...神が神であるからです。神は、言ってみれば、ご自身の手でお作りになったものを楽しむために万物を創造されました。そして、神が最も大切に思っておられるものは、「ご自分のかたち」に似せて創造された者たちです（創 1・26）。それはあなたと私です。

私たちの物語の始まり

私たちの物語、すなわち神が私たちを望まれる理由の物語は、神が私たちの創造主であるという聖書の観念から始まります。このことを完全に把握することはできませんが、要するに、私たちがここに存在するのは、神がそれを望まれたからです。神が無作為に行動されることはありません。目的をもって行動されるお方です。人類を創造されたとき、ご自身の不足を満たそうとされていたわけではないのです。必要ではないのに私たちを創造されたという事実から、私たちの創造の合理的な説明は一つしかありません。神は人間を楽しむために（そして人間にご自身を楽しませるために）私たちが存在することをお望みになったのです。

神が私たちをお造りになったため、聖書は神を私たちの「父」と呼び、アダム以降の人々を神の子たちと呼んでいます。[1]神、および神の私たちとの関係を説明する際、聖書で家族に関連する言葉を使っているのはそのためであり、偶然ではありません。

しかし、私は少し先走りしたようです。聖書での家族中心の言葉遣いのコンテキストを本当に理解するには、神が地球と人類を創造された以前に戻る必要があります。驚かれるかもしれませんが、そのとき神はお独りであったわけでもないのです。それは神がご自分の孤独を癒すために私たちを創造されてのではないということに確信が持てるもう一つの理由です。

聖書は、神が人間をお造りになる前に、他の知的生命を創造されていました。聖書ではそれを「神の子たち」と呼んでいます。私たちはそれを御使い（天使）と呼びます。旧約聖書のヨブ記には、神が地球の土台を据えたとき、神の子たちは「喜び呼ばわった」と書かれています。神の子らは、既に存在し、見ていたのです。

「神の子たち」という語句について考えてみてください。「子たち」（英語では「息子たち」）と訳されているヘブライ語の言葉は、総合して「子供たち」と訳すことができます。[2]「神の子たち」というような言葉は何を示唆しているのでしょうか。

それは家族です。

「子たち」は、会話の対象が家族である場合に使う言葉です。ヨブ記 38・4-7 の家族は天の家族つまり超自然的家族です。神は、見えない世界でお造りになった知的生命の父です。

神には既に超自然的家族がいたという事実は、創世記の物語における最初の人類であるアダムとイブの創造に対する神の動機を理解する手がかりとなります。神は、超自然的家族に加えて、*人間*の家族を望まれました。信じ難いことですが、エデンの園の物語は、これら二つの家族が神の御前に一緒に暮らすことを神が望まれていたことを物語っています。つまり、御使いと同様に、人間は元々神ご自身の御前に生きるのにふさわしいように造られていたことを意味します。

しかし、どうしてそれがわかるのでしょうか。見てみましょう。

聖書の最初の書である創世記は、天地創造から始まっています。神は、人間（アダムとエバ）の創造に至るまでに多くを創造されました。物語は、神による植物、昆虫、空を飛ぶ生き物、陸生動物の創造へと展開していきます。これらの生き物はどれも、神と関

---

[1] イザ 63・16、64・8、ルカ 3・38、使徒 17・28-29、ロマ 1・7、一コリ 1・3
[2] 創 3・16、30・26、31・43

係を持つ能力を有しませんでした。神と会話することもできませんでした。考えを神と共有したり、神への感謝を表現したりすることもできませんでした。家族のメンバーは相互に関係します。家族は知的および感情的なレベルで対話します。家族は仲間としての絆を形成します。植物や動物がいくら見事であっても、子供の役割を果たすことはできませんでした。家族ではなかったのです。神が本当に望んでおられたのは家族です。ご自身に似た何かを創造する必要がありました。

神の体現者

神は、あらゆる種類の植物と動物で地球を満たされた後も、行わなければならない仕事がありました。神は「神のかたち」、および「神の似姿」の新しい生き物を創造することを決められたのです（創 1・27）。これが神の地上の家族となります。

「神のかたち」は、聖書では重要な概念です。人間は神のかたちに創造されました。神の「かたち」を動詞と考えると、この観念を理解しやすくなります。私たちは神を*体現するため*、つまり神を代表するために造られたのです。

神を体現するとはどういう意味でしょうか。創世記 1・27-28 に答えがあります。

> 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。

神にとっては、ご自分の世界を管理することなど、たやすいことでした。神ですから。神の能力を超えるものは何もありません。しかし、代わりに神は地上の家族を造られました。神の子たちは、被造物を管理して維持するという神の役割を担うことになります。神の代役およびパートナーになるのです。神を体現することとは、地上で神を代表することを意味します。神は、ご自身で行ってもよかった仕事を人間に与えられたのです。神の子たちが神の事業に参加することを望まれたのです。神の事業は、“家業”となるのです。エデンの園は神のお住まいであっただけではなく、神の拠点（ホームオフィス）でした。私たちは神の協力者となるために創造されたのです。

神は、お造りになった人間が、地上で神を体現するという任務を果たすことができるようにしました。知性や創造性など、ご自分の特性（神の特質と能力）を人間と共有されたのです。聖書は、人間は神ご自身の劣等バージョンであると語っています。神は、私たちが共同統治者、共同管理人として神の新世界に参加できるように、私たちをご自分の似姿にお造りになりました。

神を体現するという概念が重要である理由は複数あります。それは私たちに確実で強いアイデンティティを与えてくれます。人間一人ひとりが神の子となりパートナーとなることが神の元々の望みだったのです。*それ*が神の人間の見方です。また、私たちも人間をそのように考える必要があります。神は、私たち一人ひとりが、一人ひとりの人間を自分の兄弟姉妹と見なすことを望んでおられます。私たちはすべて、神が家族に加えたいと望む神の体現者として同じ立場にあります。人種差別、暴力、操り、および強制は、神の人類のデザインの一部ではありませんでした。これらは、反逆と罪の悪の結果です。神は、愛する人類に対して罪が行ったことを嫌悪されています。私たちが自分の道徳的怠慢を考えるときには、このことを覚えておかなければなりません。

神を体現することは、私たちに目的を与えます。私たちには使命があります。小ささや弱さ、短命さにかかわらず、人間一人ひとりには他の誰かの人生で果たすべき何等かの役割があります。神を褒めたたえ、仲間である体現者を敬するために私たちが全力を傾ける仕事はすべて*霊的な*召命となります。神の考えでは、牧師、聖職者、司祭などが他の召命に勝っているわけではありません。私たちの生き方により、神と生きる人生および調和がどのようなものかを再認識させることによって仲間である体現者に恵みをもたらすことも、害悪をもたらすこともできるのです。私たちが何を行うかは重要です。それらはたいていの場合小さな、見栄えのしない行いなのです。

これらはすべて、最初の質問に対して私があのように答えた理由です。神がお望みのこととは？神はあなたを望んでおられます。家族をお望みです。協力者をお望みです。あなたが自分が誰なのか、そしてあなたの人生がなぜ神にとって価値あるものなのかを知って欲しいと思っておられます。

しかし、まだこの考察を開始したところです。物語にはまだまだ沢山のことが含まれています。この世界での生活、そしておそらく自分の家庭内の生活も、神のビジョンに沿っていません。それをすべてだめにする何かが起こったのです。神は心痛があまりに大きかったため、人類を諦めると決める*寸前*でした。

第 2 章

それでも神は家族を望まれた

前章では、地上で神を体現することができるように神は人間を備えられたということを強調しました。それはご自分の特性（特質や能力）を人間と共有することによって行われました。それはすばらしいことでした（今でもそれは同じです）が、そこから物語は興味深くそして恐ろしくなっていきます。神の特質の一つは自由です。私たちはそれをよく自由意と呼びます。世界になぜ悪があるのかと考えたことがある方のために、聖書に示された答えをここに挙げます。

反逆 1

ご自身の特性を神の子たちと共有するとお決めになったとき、神はその決断が何を意味するのかをご存知でした。すべてをご存知ですから、どうなるか明らかに理解しておられました。神は天上の家族についても同じ決定をされました。天上の家族も、知力や自由といった能力を持ちます。彼らは創造主からそれらの資質を与えられたのです

遅かれ早かれそれらの資質が誤用されたり悪用されたりするであろうことも、神はご存知でした。神の子たちは神の似姿ではあるものの、彼らは神ではないということを神は十分に承知されていました。彼らは神よりも*劣る*者でした。神が完全であるのに対して、彼らは不完全でした。やがて、神の子たちの一人（または一人以上）が恐ろしい過ちを犯すか、無分別な私欲によって行動し、神が望んでいたことに対して反逆することになるのです。

エデンの園で起こったことはまさにそれです。アダムとエバが反逆したのです。彼らは園の中の樹木の一つから食べてはならないという神の命令に反したのです。罪を犯し、神の御前での永遠の命を失ってしまったのです。その後生まれた人間はすべて、エデンの外で、神から疎外されています。使徒パウロは、このことを「罪の支払う報酬は死である」（ロマ 6:23）と、うまく要約しています。

この悲劇は、それよりもさらに前の反逆によってもたらされました。超自然界の神の子たちの一人が、人間の家族を持つという神の決断を侮辱することを決意し、エバを誘惑することにより、神が彼女とアダムを破壊するよう望みました。この神の子は、へびの姿でエバの前に現れました（創 3・1-7）聖書は、このへびをサタンおよび悪魔などと

呼んでいます（黙 12・9）。彼は、首尾よくエバに罪を犯させましたが、人類を永久に追放することはできませんでした。

ここには深い真実があります。その最初の真実は誰もが人生でいつかは持つ疑問に答えます。世界に悪があるのはなぜかという疑問です。この世に悪が存在するのは、神がご自身のような存在を創造することを望まれたためです。神に悪の側面があるという意味ではありません。神は、肉からできたロボットやあらかじめプログラミングされたコンピュータを造るという考えを拒否されたのです。

この最後の点は重要です。私たちの神の似姿は本物でなければなりません。実際に決断を下す真の自由を持っていなければ、神の似姿にはなれません。神はロボットではありません。私たちはその神と似るように創造されたのです。真の自由意志なくしては、神を心から愛し、従うことはできないのです。あらかじめプログラミングされている決断は、本当の決断ではありません。愛や従順などの決断が本物であるためには、現実的な代替案がある状況で行うものでなければなりません。

悪が存在するのは、これらすべての結果です。それは人々が自由という神の素晴らしい贈り物を悪用し、自己の欲求の満足、復讐、自治の幻想などのために使うからです。自由の乱用はエデンで始まりました。

しかし、神はこのことに不意を突かれたわけではありません。悪は予想しておられました。何が起こるか予見し、それに基づき計画されていました。神は、神の人間の子たちが反逆したために彼らを破壊することはなさいませんでした。代わりに彼らを赦し、救い出すのです。聖書は、神が何が起こるかをあらかじめ知っておられ、反逆が起こる前から、正確には「天地が造られる前から」赦しと救いのご計画を立てておられたことを明らかにしています（エペ 1・4、ヘブ 9・26-10・7、一ペテ 1・20）。

その救いの計画は、最終的に神が人間となられることを必要としました。物語のその部分については後述します。あのクライマックス的イベントのずっと前に、エデンで起こったことに対する代償がありました。神はアダムとエバ（したがってその子孫）をご自身の御前から追放されたのです。エデンはもはやなくなったのです。父である神との永遠の命の代わりに、人類の前途は死となりました（ロマ 5・12）。それが生命の源である神から離れたことによる最終的な代償です。

事実上、神は子たちを家から追い出されたのです。しかし、それはへびが望んだ人類の破壊という結果ほどは、ひどいものではありませんでした。神が人間の家族を持つというご計画を諦められたわけではありませんでしたが、反逆には代償があったのです。神

はサタンも罰されました。神の世界に死をもたらしたサタンは、後に地獄として知られるようになる死人の世界の主となりました。

代替策なし

皆さんはこの時点で、人間の家族を持つというご計画全体を神がなぜ破棄されなかったのだろうと疑問に思っておられるかもしれません。しかも、神は自由意志が罪につながるであろうこと、暴力、怠慢、利己心、その他の恐ろしい行為という形で何千年もにわたる不幸をもたらすであろうことを承知のうえで、それを許容されたのです。あなた自身が苦悩中にあったり、周囲の方々が苦しんでいるのを見ておられる方は、おそらく、神がすべてを破壊してくださっていよかったのにとまで思っておられるかもしれません。

信じがたいことですが、神はその気持ちを理解しておられます。神は、あなたに見える悪だけでなく、それよりも無限に多くの悪を見ておられるのです。それは神が望まれたこととはまったく違います。しかし、あなたは「*彼は神*」なのだから単にすべてを覆すことはできないのだろうかと問います。そんなに単純なことではないのです。考えてみてください。悪を行うすべての者を排除してはじめて神はこの世の悪を排除できるのです。言い換えると、神は私たちすべてを消滅しなければ悪を終わらせることはできないのです。聖書に記されているように、誰もが罪を犯し（ロマ 3・10-12）、「神の標準にはほど遠い存在」（ロマ 3・23、JLB）なのです。神はそのようにして悪を終わらせることは、もちろんできますが、それをなさいません。人類を深く愛しておられるため、それは選択肢には入れておられないのです。

これを突き詰めていくと、驚くべき真実が浮かび上がります。神は私たちを神の似姿に創られることがどのような結果をもたらすかをご存知でしたが、その結果は人間の家族をまったく持たないことよりは、好ましいものだったのです。神はこの世の罪と苦難を見ておられ、その原因もご存知です。それによって心を痛めておられます。神は人間の子たちを強く愛しておられるため、人間の家族を持ちたいという当初の熱望に背を向けることはありません。次善策はないのです。あるのは元々のご計画のみです。エデンで発生する反逆、そしてそれに続く過ちや罪のすべて（私たち独自のものも含めて）をあらかじめ知っておられたにもかかわらず、神は依然として人間の家族を心から望んでおられます。

エデンでの出来事は、物語の始まりにすぎません。神はアダムとエバを神の家から追放されました（創 3・22-24）。さらに神はへびをのろい（創 3・14-15）、その御前から追放されました（イザ 14・12-15、エゼ 28・16）。メッセージは説得力があり単純なものでした。すなわち、反逆は罰せられるのです。誰もがこのメッセージを理解することだろうとお思いでしょう。そうではなかったのです。状況はさらに悪化しました。

反逆2

この世にこれほど多くの悪があるのは、エデンの園で人類が罪に陥ったためだと聖書は教えている、とどこかで聞いたかもしれません。それは部分的にしか正しいと言えません。エデンでの悲劇の後、人類をさらなる邪悪と大混乱の底に突き落とした出来事があと二つあります。

まずその一つは創世記6章1-4に記述されており、聖書全体の中でも奇妙な出来事の一つでであることはほぼ間違いありません（私はこのことについて本を書いたほどです）。この物語には、神の超自然界の子たち（「神の子たち」）が自らを体現させるために人間の子たちを創ることで、神を模倣しようとしたことについて書かれています。彼らは人間の女性（「人の娘たち」）をその目的に使うことにしました。これにより、彼らは天の父である神のライバルとなったのです。人間を神の家族のメンバーにするという神の願望に満足する代わりに、彼らは彼ら独自の人間を支配する君主となることを望んだのです。これは神のご計画ではありませんでした。神は奴隷ではなく家族を望んでおられたのです。

これらの「罪を犯した御使たち」（二ペテ2・4）は、天と地の境界線を破りました。彼らは、「自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った」（ユダ6）のです。その結果、神は彼らを地獄へ送られましたが（ニペテ2・4-5、ユダ6）、彼らが行ったことは取り消されたわけではなく、悲惨な結果をもたらしました。この反逆についての聖書の説明の後に続く2節をご覧ください。

> 主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め...（創6・5-6）

考えてみてください。*すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりだったのです。*神は地の上に人を造ったのを*悔い*て、*心を痛め*た、とあります。

これは、それがもたらす邪悪と悲しみです。超自然界の最初の反逆は、人間が神と共に生きる永遠の命を失うこという結果をもたらしました（これだけでも十分に悪い状況です）。この反逆は、罪の影響を拡大し、人間の自己破壊を加速することになりました。神は、この結果を深く悔やまれました。人間は永久的な損傷を受けたのです。

聖書は、洪水を送って人類を滅ぼすこと以外に解決法はないと神が判断されたことを語っています（創6・17）。洪水の物語では神が憤慨したとは言っていないことに注意す

ることが重要です。神は状況を見て心を痛められたとだけ語っています。神は人間に自由を与えることを決めておられました。それを奪うことはできませんでした。それは彼らが神の似姿ではなくなること、つまり真の人間ではなくなることを意味するからです。唯一の選択肢は、再出発して、反逆的な神の子たちがもたらしたことを終わらせることでした。

神の目から見て、正しい人はノア一人だけだと言われています（創6・9）。つまり少なくとも一人いたのです。神はそれを無駄にしません。人間の家族を持つというご計画を進められます。

神は、ノアの家族と多くの動物が生き残るために、彼に箱舟（大きな船）を作るように命じました。神はまだ希望を捨てておられませんでした。人間がそれほど深くまで墜落しても、人間の子たちが神と一緒にいることができるようになるという希望です。哀れみ深い神は、洪水に備え、人々が邪悪に背を向けて赦しを得る（二ペテ2・5）ことができるように彼らにこれから何が起こるかを知らせるため、ノアに120年の期間を与えました（創6・3）。

最終的には、人々は聞く耳を持ちませんでした。神の慈悲深い警告を拒否したのです。ここでも神の子たちは自由意志で神に背きました。神が心を痛められたのも当然です。それでも、少なくともノアとその家族がいました。大洪水の後、神はアダムとエバに与えた当初の命令（「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」創9・1）を繰り返されました。神はノアとその家族によってやり直しを図ります。ノアと契約を結ばれました。それは全人類に及ぶ契約です（創9・8-17）。契約とは約束または誓約を意味します。この契約は一方的なもので、人類を決して破壊しないという神の約束がすべてでした（創9・11）。驚くことに、神は依然として人間の家族を望まれました。

神からの親切の乱用が続いたことは信じがたいことではありますが、それほど驚くことではありません。第三の反逆が大洪水の後に続きます。この反逆は聖書の物語の残りの部分の枠組みとなり、再び神の不屈の忍耐と愛を示しています。

反逆3

アダムとエバやノアの大洪水の物語と同様に、バベルの塔についても聞いたことがあるでしょう。聞いたことがなくても大丈夫です。教会に通う人々でもほとんどがそこで*実際に*起こったことを認識していないのですから。

バベルの塔の物語は創世記11章1-9に書かれています。洪水の後、神はノアの子孫が増え、地上に満ちることを望まれました。アダムとエバのように、彼らは神の協力者となり、創造物を管理するはずでした。その代わりに、彼らはバベルという場所に集まり、自分たちの栄光のために塔を築いたのです（創11・1-4）。

これがこの物語のよく知られているバージョンですが、その真の意味は聖書の別の書であまり知られていない二つの節にあります。次の節です。

> いと高き者は人の子らを分け、諸国民にその嗣業を与えられたとき、神の子らの数に照して、もろもろの民の境を定められた。主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。（申32・8-9）

これらの二節では、バベルの塔で下された裁きの一つは人類の分裂であったことを語っています。この時点までは、神は一つの集合体として人類を扱ってこられましたが、それはバベルで変わったのです。人間は、言語および地理により分断されるのです。

さらに悪いことに、神は人類からご自身を分離されました。神の御心に対する人間の反逆に愛想をつかされた神は、超自然界の神の家族の他のメンバーである神の子たちに地上の諸国を委ねられました。これは大洪水の前に反逆した者たちとは異なるグループでした。神は人間を神の家から追放することはできませんでした。それはエデンで既に行われたことです。大洪水の後、人類を破壊しないと約束されました（創9・11）。そのため、あの大災害を繰り返すわけにはいきません。では神はどうすればよかったのでしょうか。事実上、神は「もういい！私があなた方の神であることをあなた方が望まないのであれば、私の天上の一部の“助手たち”をあなた方に割り当てよう」とおっしゃったようなものなのです。

この裁きの影響はさまざまな形で現れました。聖書は、どれだけの時間がかかったかは語っていませんが、諸国を委ねられた超自然界の神の子たちの仕事ぶりはひどいものでした。彼らはあまりに腐敗したため（詩82・1-5）神は彼らも裁かなければなりませんでした。やがて神は彼らの不死の命を奪い、諸国を取り戻すことになります（詩82・6-8）。このフラストレーションのために、神は人間の家族を持つという意味で、「子なし」の状態になられたのです。愛想をつかされたのです。諦めたのです。と言いたいところですが... そこまではいっていません。

神の絶えざる愛

バベルの塔での悲劇的結末の後、何が起こったと思いますか。子供を産む年齢をはるかに超えた女性（サラ）の夫であるアブラハム（当初はアブラムと呼ばれた）に神が現れたのです。神はアブラハムと契約を結ばれました。この老人とその妻に息子ができると約束されました。神は奇跡を働きます。彼らの息子は、地上の神の新たな家族の始まりとなるのです（創12・1-9、15・1-6、18・1-15）。

神の天軍のメンバーたち（超自然界の神の子たち）に人類の監督を任せていた神は、アブラハムによって新たに神ご自身の家族を開始することを望まれました。アブラハムは、神の約束を信じました（創15・6）。神の関心や好意を勝ち取る必要はありませんでした。やり直すためにアブラハムをお選びになったのは*神*でした。神とアブラハムの関係は、神から始まりました。アブラハムは信じました。

その後、神の召令とアブラハムの信仰で始まった契約関係は割礼という物理的な印によって記念されました（創17・1-14、ロマ4・1-12）。アブラハムの全家族が彼の例に倣いました（創17・23）。この印によって、アブラハムの子孫は、神がご自身の家族として望まれた民として識別されました。割礼は、アブラハムの血筋の女性たちの印にもなりました。彼女たちは拡大部族内でのみ嫁ぐものとされていたため、アブラハムとサラが独自の子供を設けることを決めたときに彼らから超自然的にその民が造られたものであることを思い出すのでした。

神のアブラハムとの契約は、神の約束を信じること、すなわち信仰に基づいていたということを認識することが重要です。神は、規則を守れる人間を見つけたためにアブラハムに接近されたのではありません。救いは行動に基づきません。救いを獲得することはできないのです。それができたとしたら、神が私たちの功績に対して義務を負うことになってしまいます。私たちの功績に答えて何かを支払う義務です。これがどれほどばかげたことが考えてみてください。アブラハムとその子孫は、契約の印を守ることで、神の約束を信じることを示したのです。割礼は、彼らの忠誠の対象が何なのかを外面的に示す一方法でした。

使徒パウロは、信仰に基づく忠誠の例としてアブラハムを使っています（ロマ4・1-12）。アブラハムは規則に従う*前に*、神を信じ、神に受け入れられたのです。つまり実際の規則とは信仰を示すことだったのです。規則が信仰に取って代わったのではありません。信じること（信仰）は不可欠要素でした。その信仰に忠実であること、つまり神への忠誠については後で検討します。今日、私たちはそれを弟子訓練（弟子として生き

ること）と呼びます。信仰と忠誠はそれぞれ異なるものです。関係はありますが、どちらも他方に代わるものではありません。救いと弟子についても同じことが言えます。

アブラハムに息子（そしてその子を通して偉大な国家へと成長する新しい家族を開始すること）を約束することは、エデンでの大惨事以降神の二度目の契約でした。最初の契約はノアと結んだものでした。どちらも人間の家族を持つという神の夢を維持するためにデザインされていました。しかし、これらの契約について重要なのは、神が諦めないということだけではありませんでした。それは永遠の命をより多くの人々に与えるためのものでもありました。神は人類を見捨てられたわけではなかったのです。神が人々を愛さなくなることはあり得ませんでした。神は、依然として人間の家族を望んでおられました。

神はアブラハムへの約束を守られました。アブラハムとサラは、実際に息子（イサク、創17・19・21、21・1-7）を授けられましたアブラハムの大家族はやがて「イスラエル」として知られるようになります（創32・28、申32・9、イザ44・1）。この名前は旧約聖書で神に属する人間の家族を表すために最も頻繁に使われています。では他の諸国の人々、バベルの塔での反逆の後に神の子たちが神から任せられた諸国の人々はどうなるのでしょうか。聖書ではそれらの人々を、「イスラエル出身ではない」ことを意味する「異邦人」という言葉で呼ばれます。バベルでの出来事にもかかわらず、神はそれらの人々をお忘れにはなりませんでした。

新しい民族（イスラエル）によってもう一度やり直すだけでなく、神はアブラハムにその子孫がいつの日か、神に見捨てられた他の諸国の恵みとなるとお告げになったのです（創12・3）。その何年も後に、アブラハムの血を引くイエスは、この世のすべての諸国を神に立ち返らせる子孫となるのです（ガラ3・16-18、26-29）。イエスが登場される前にも、異邦人は他の神々を拒否することを選択し、神を信じ、神の契約の印を持つことにより、神の家族に参加することができました。

アブラハムからイエスまで、長い時間が経過しました。「主の分」（申 32・9）としてのイスラエル独自の歴史は、誇れるようなものではありませんでした。彼らは神の民ではありましたが、悲しくも、というよりも予想通りに、忠誠に欠けたのです。イスラエル史上最も暗い時期がやがて訪れます。

第 3 章

神はご自身の家族に裏切られた

聖書のイスラエルの物語は長く、勝利と悲劇に満ちた紆余曲折のある出来事です。神はそのことに驚いてはおられません。神は人間について予測することができました。常に、人間がどういう相手かをご存知でした。

愛想をつかされる

神はアブラハムにその子孫の将来は困難なものになるということを知らせます。彼は正直なお方です。アブラハムに「あなたはよく心にとめておきなさい。あなたの子孫は他の国に旅びととなって、その人々に仕え、その人々は彼らを四百年の間、悩ますでしょう」（創 15・13）とお告げになりました。これは凶報でした。しかし、神は次のように希望も与えられました。「しかし、わたしは彼らが仕えたその国民をさばきます。その後かれらは多くの財産を携えて出て来るでしょう」（創 15・14）。

その通り、アブラハムの孫であり、神によって「イスラエル」と新たに名付けられたヤコブに率いられるアブラハムの子孫たちは、パロの支配下のエジプトに最終的に辿り着きます。彼らは、飢饉を避けるために神の承認を得てそこに行ったのです（創 45・5-1）。悪い方向に進んだのは、飢饉が終わっても、神に与えられた土地へ戻らなかったためです。エジプトに長居しすぎたのです。

エジプトでは、イスラエルの人口が増加したため、パロが国の支配を維持できるかどうかについて被害妄想になるほどでした（出 1・8-10）。パロはイスラエル人に重労働を強制し、男児が生まれた場合は殺しました（出 1・14-16）。しかし、神の介在によりイスラエル人は増え続け、強大な民となりました（出 1・8-21）。

結局のところ、イスラエルは、エジプトで過酷な状況下何世紀も過ごすことになります。やがて、神はモーセという新生児の命を救います。神は、その子がパロ自身の家で育てられるように、状況を画策されました（出 2・1-10）。モーセは特権階級の生活をしていましたが、ある日死刑に相当する罪を犯しました。無力なイスラエル人を守ろうとしたことから始まった喧嘩の際に人を殺害してしまったのです。裁きから逃れるためにエジプトを脱出しました。

モーセは、ミデアンという砂漠の地で新しい暮らしを見つけました。神は、シナイ山の燃える柴でモーセにお会いになり、その出会いがその民と世界の歴史を変えることになるのです（出 3・1-15）。神はパロに立ち向かうためにエジプトにモーセを送り返しました。神の民を解放することを要求するためです。神はモーセを守り、力を与えることを約束されました（出 3・16-22）。

この話の残りは、世界でも最も有名な物語です。聖書を一度も読んだことがなくても、この話を聞いたり、それに関する映画の一つを見たりしたことがあるでしょう。パロがイスラエル人を解放することを拒むと、神はエジプトとその神々に対して災いを送りました（出 7-12）。モーセを使って、奴隷的拘束から大勢のイスラエル人を解放することをエジプトに強いました。エジプト人たちがイスラエル人をを砂漠の中まで追跡して虐殺しようと決めたとき、神は紅海を分け、彼らを救いました。紅海横断は、聖書の中でも最も壮観な奇跡です。しかし重要なのは、スペクタクルではなく、民族を守ることでした。神は家族を望まれたのです。

律法と忠誠

最終的に、神の民は、神が最初にモーセに話をされた場所へと戻りました。神はその地で神の律法である十戒をイスラエル人に与えられ、彼らと契約を結ばれました。十戒が与えられる前もイスラエルが既に神の民であったことを認識することは重要です。モーセがパロに立ち向かったときも、神はその民を神の家族と呼ばれました（出 3・7、10、4・23、5・1、6・7、7・4）。律法はイスラエルの民が神の家族における地位を*獲得する*ためのものではありませんでした。イスラエル人は*既に*神の家族だったのです。

この区別は重要なことであり、詳しい説明を要します。神は、その民が神の家族での地位を獲得するためではなく、彼らが神の家族に属することを望んでいるということを示すために律法を与えられたのです。神の律法は、神に対して不義を働いて、他の神と手を組むことはないということを神に示すためのものです。忠実な信者であれば、イスラエル人は「祭司の国」のように他の諸国に仕えるために神に使われることができます。神は人間を家族に含めることを望まれたのです。それを一つのグループであるイスラエルから開始しようとされていたのです。彼らが忠実な信者であったならば、他のすべての諸国を祝福することができたでしょう（創 12・3）。

この契約を理解するためにもう一つの見方があります。神の律法は、神に彼らを愛させるために十分良い人間であるためのものでもありませんでした。神は既にイスラエルを愛しておられました（申 7・7-8）。神は年老いたアブラハムとサラが子供を設けることを超自然的に可能にされました。やがてその子の子孫がイスラエルとなるのです。肝心なのは家族を持つことでした。神は家族の資格を得るための一連の規則を作られたわ

けではありません。彼らは神の家族だったのです。*神の律法は、彼らに対する神の思し召しを良くするためではなく、神の子たちが他の神々を回避して、お互いに幸せで平和な暮らしができるようにデザインされていました。*

いつもと同様、神は彼らの自由意志をはねつけることはされませんでした。ただ彼らが神（神がどのようなお方であるか、そして神が愛によって彼らを創造されたこと）を信じ、他の神々をすべて見捨てることをお求めになっただけです。イスラエルのメンバーは誰でも、神の愛を見捨てたければ見捨てることはできました。信じないことを選択することも、他の神を崇拝することを選択することもできました。これから説明するように、彼らの多くはそれを選択しました。

イスラエルがシナイ山（神から律法が与えられた場所）を出ると、神は人間の姿の御使いを用いて彼らを約束の地へと導かれました（出 23・20-23、士 2・1）。その途中、人々は十分な食料と水がないことについて絶えず不満を言い、神はそれらを与えてくださいました（出 15・22-27、16・1-30）。土地に住む強敵に対して命懸けで戦わなければなりませんでしたが、神はイスラエルの民を破壊からお救いになりました（申 2-3、ヨシュ 11-12、詩 136・10-24、使徒 13・19）。

悪化の一途/悪循環

神に約束の地に到達させていただいた後、イスラエルは神に対する愛であふれ、信仰による忠誠はそれまでにないほど高まったことだろうとお思いでしょう。そうではないのです。彼らは悪と共存してもやっていけると決めたのです。偶像崇拝者たち（偶像で他の神々を崇拝する人々）を土地から追放することを拒みました。まるでイスラエル人は、過去について何もわかっていなかったかのようです。つまり反逆は災害をもたらすということを。彼らの不義と神への愛の欠如は、次のような失意のシーンをもたらします。

> 主の使がギルガルからボキムに上って言った、「わたしはあなたがたをエジプトから上らせて、あなたがたの先祖に誓った地に連れてきて、言った、『わたしはあなたと結んだ契約を決して破ることはない。 あなたがたはこの国の住民と契約を結んではならない。彼らの祭壇をこぼたなければならない』と。しかし、あなたがたはわたしの命令に従わなかった。あなたがたは、なんということをしたのか。それでわたしは言う、『わたしはあなたがたの前から彼らを追い払わないであろう。彼らはかえってあなたがたの敵となり、彼らの神々はあなたがたのわなとなるであろう』と」。（士 2・1-3）

神はその民を裁かなければなりませんでした...再び。神がおっしゃったのは、要するに、「私はここから出ていく。あなた方は私を求めていないのだから、自分たちで何ができ

るか見てみようではないか」ということです。これは以前にもあったことです。そして、以前と同様に、神が共にいない状態での神の民の行いはひどいものでした。歴史を再論議しているところですが、神の応答にも見覚えがあります。神はイスラエルに戻って、イスラエルを苦難から救い出し続けました。私たちは皆そういう人を知っています。あなたもそういう人の一人かもしれません。愛のために誰かを助け続けるのです。それが不合理に見えても。そして神がなさっていることを考えると、常軌を逸したことのように見えます。しかし、神は人間から求められていなくても、人間の家族をお望みなのです。神の愛は論理に反するものです。

前述の場面が記されている士師記は一見して終わることのないサイクルを語っています。つまり、霊的反逆、それがもたらす苦悩、助けを求めて主に叫ぶこと、そして神が愛を持って戻ってこられることの繰り返しです。そのサイクルは、数世紀にもわたり続きました。それは、イスラエルの国の人々が祭司であり預言者であるサムエルに彼らを統治する王を要求したときに、一種のクライマックスに達しました。

予想通り、人々が選んだ王（サウル）は、まぎれもない災厄でした。隠れているところを引きずり出して王位に就けなければならなかったような人間を選んだわけですから、うまくいくはずはないことはわかりきっています（わかるはずです）。最終的に神はサウルに代えてダビデを選ばれました。ダビデは道徳上混乱していましたが、サウルよりは良かったのです。神への不義や、愛の不足を見せることはありませんでした。彼は、神の道徳律をいくつも破りましたが、悔い改め、他の神を崇拝することは決してありませんでした。そのため、神はイスラエルの合法的な支配者になれるのはダビデの子孫のみであるという約束を彼と結ばれました。

この契約は、ダビデの王朝を築くためのものでした。神が合法的な王と見なすのはダビデの子孫のみです。悲しいことに、聖書の物語のイスラエルの残りの歴史には、血筋は正当ではあるものの、王にはふさわしくない人物が多数含まれていました。神は、他の神々に従い、真の神に不義であったという理由でダビデの子孫の多くを王の座から追放しなければなりませんでした。王位を継承するダビデの子孫は、正当な家系からの出身であるだけでなく、神を愛していなければなりませんでした。すべての王がそれぞれ神の律法の写しを手元に置く必要があったのはそのためです（申 17・18、王下 11・12）。彼は忠実な信者の模範でなければなりませんでした。

ダビデの息子のソロモンは、イスラエル史上最も偉大な王でした（土地の保有と富がリトマステストだったとしたらの話です）。悲しいかも、真の神への信仰による忠誠心はぐらつきました。ソロモンは他の神々に犠牲を捧げ、一連の政略結婚を行い、それによ

ってイスラエルに他の神々の崇拝がもたらされました。言い換えると、ソロモンは国家の崩壊につながる霊的妥協と反逆のサイクルを開始したのです。

最後の裏切り

ソロモンの死後、イスラエルの十二部族のうち十部族が彼の継承者に対して謀反を起こしました（王上 11・41-12・24）。イスラエル王国は、部族と地理によって二つに分裂しました。神の家族は、いわゆる崩壊家庭となりました。この後に続く時代の多くの王は、神の律法の写しなど見たこともないという悲しい有様でした（王下 22・8-13）。

分裂国家の北の部分（政治的に反逆した十部族）は、すぐさま霊的反逆に陥りました（王上 12・25:-33）。土地を与え、彼らを超自然的に存在させた神への信仰による忠誠を示す代わりに、イスラエル人の多くは神を裏切ったのです。この時期に地方を放浪していた預言者たちが、霊的反逆を「娼婦のような振る舞い」および霊的姦淫になぞらえたのはそのためです。それは鮮明なたとえでした。国の南の部分（二部族）は、徐々に霊的反逆に陥りました。徐々に陥いった罪でも、罪は罪です。

神を見捨てることによって、物事がうまくいくはずがありません。聖書に記されているように、「その罪は必ず身に及ぶことを知らなければならない」のです。いつもと同様に、神は人間が自由意志を働かせてその報いを受けることを許容されました。紀元前 722 年、国の北部は、私が旧約聖書におけるクリンゴン人（テレビドラマと映画『スター・トレック』シリーズに登場する架空の宇宙人で、残虐、狡猾で卑劣な悪役）と呼んでいるアッシリア人によって最終的に制圧されました。『スター・トレック』よりも『ロード・オブ・ザ・リング』（指輪物語）の方が親しみがある場合は、アッシリア人をモルドール人と考えてください。

アッシリア人は残酷であることでよく知られていたため、この例えは気に入っています。アッシリアにより、十部族は古代世界の各地に分散し、家族は崩壊し、彼らが所有していたすべてが奪われました。国の南部の二部族は、その後百余年で（紀元前 586 年に）バビロニア人に征服されました。数千人のイスラエル人が強制的にバビロンに捕囚されました。

正直に言って、この時点で神がその民を見捨てたとしても、理解できます。彼らは、アブラハム以降千年以上にわたり繰り返し反逆してきたのです。自業自得で招いた結果を避けることは困難です。しかし、神がなされることは私たちとは違います。

神は見切りをつけるどころか、*依然として*人間の家族をお望みでした。ただし、神の民、さらに残りの人類を神の家族に含めるためには、戦術の転換が必要でした。神はその民

と一連の契約を交わしておられました。しかし、わかりきったことですが、民は単なる人間です。つまり失敗だらけです。それも予想通り定期的に失敗するのです。残りの人類は、今はイスラエルの神の敵となった超自然界の存在たち（「神の子たち」、申32・8）に任せられました。事態は複雑でした。

神には、これらすべてに二つの部分から成る解決策がありました。神の家族の最後の子たちが捕囚寸前になったとき、神は、彼らがまったく見放されたわけではないことを人々に告げるように二人の預言者（エレミアとエゼキエル）に命じられました。神はその子たちと、神の霊の到来を特徴とする「新しい契約」を結ばれます（エレ 31・31-34、エゼ 36・28）。新しい日が来るのです。

しかし「新しい日が来る」といっても、旧契約を破棄したり変更したりせずに神がどのようにそれを守るのかという疑問には答えていません。イスラエル人の多くは神を拒否して、他の神々を崇拝しました。神の律法を破ることで、神を軽視しました。神は心を痛められました。ご自身は、約束を守ることを望まれましたが、神の子の多くは誘惑により他の諸国の神々の崇拝に陥っていたのです。

それは死に至る道です。エデンでの出来事のため、真の神に頼り神の愛と約束を信じない限り、人間は永遠の命を持つのではなく、すべて死ぬ運命にあります。そのことを忘れてしまったイスラエル人が多すぎます。霊的ビュッフェ（バイキング）から好きなときに好きなように神々を選ぶことはできません。真実の神を信じ、信じ続ける必要があったのです。

イスラエルの王たちとなると、この状況は特に深刻な問題でした。神は、ダビデにその相続者たちが王位を継承すると約束されましたが、その多くは神に背を向けました。神はこの信仰による忠誠の欠如を無視することはできませんでした。また、約束を破棄することもできませんでした。それは、ご計画全体が悪いアイデアであったことを認めるようなものです。すべてをご存知の神には悪いアイデアはありません。

では、神を拒否し、神から遠ざかった民に対する約束をどのようにすれば守ることができるのでしょうか。彼らには新しい心が必要でした。彼らを導く神の臨在が必要でした。必要になったのは、アブラハム、そしてダビデの子孫の一人で、最終的に王となることのできる、神の完全な体現者でした。その子孫は、人類に対する死の呪いも覆す必要がありました。しかし、単なる人間がどのように死を征服することができるのでしょうか。彼は、同時に神でなければなりません。そんなことがあり得るのでしょうか。

問題ありません . . .

第 4 章

神が人間の家族に合流された

クリスチャンは、イエスの来臨についてよく知っています。彼らは、少女であり処女であったマリアからイエスが奇跡的に生まれたことを知っています（マタイ 1・18-25）。特にクリスマスの飾りつけなどにみられる飼い葉おけの乳飲み子イエスのイメージは、文化的にも広く知られています。古くてもいまだに人気のあるクリスマスソングのいくつかでも、イエスが旧約聖書のメシアに関する預言を実現したことを祝っています。

イエスには十字架以上の意味がある

通常、イエスが最終的に十字架での死を遂げるためにこの世に生まれてこられるときのことが、焦点となっています。イエスは、私たちの罪を赦すため、つまり、私たちが再び神の家族に加わるための手段となられたのです。言い換えると、クリスチャンのほとんどがイエスについて考えるとき、十字架が念頭にあります。しかし、それによって見落とされていることがあります。

十字架を焦点とするがために、神がイエスにあって人となられたという事実が若干失われてしまいます。ほとんどのクリスチャンは、旧約聖書での契約を成就するため、前述した超自然界での反逆の結果を覆すためなどの多くの理由から、神が人となることが*不可欠であった*ということを認識していません。

いつの日か人間は永遠に神と一緒に生きることができるようになるという希望は、人間の排除またはご計画の破棄を拒んだ神のお陰で生き続けています。神は繰り返し人類に立ち戻られ、赦しと、ご自身との関係へと人類を招かれました。神は、彼らが信じること、そして神と、他の人間と相互に協調して暮らすことによってその信仰を示すことを望んでおられました。しかし神の子たちはいたるところで神を拒否しました。まるで「それでもあなた方が私と一緒にいることを許します。そのことを信じなさい。そしてあなた方の心がどこにあるのかを示しなさい」と神がおっしゃるたびに、問題が悪化したかのようです。聖書は、羊飼いのいない、放浪する羊の例えを使ってこの性癖を表現しています（イザ 53・6、マタイ 9・36）。かなり的確です。

前章の末尾で申し上げたように、神の子たちが信じるためには新しい心と神の臨在が必要でした。彼らには、彼ら自身から救われるため、そして彼らを愛する神との永遠の命

を含まない宿命から救われるための手段が必要でした。神が契約を守り、死ののろいを無効にして、神の民が信仰の道を歩んでいくための方法が何かあるはずです。

これらの問題に対する神の解決策は、極端なものでした。それには神が*人間になる*必要がありました。人類に合流することが必要だったのです。ここで、*イエスが物語に登場します。*イエスは神が人になったお方でした（ヨハネ 1・1、14-15、コロ 1・15-20、2・6-9）。イエスはこれらすべての障害に対する解決策でした。

イエスが全人類に代わって死ぬことではじめて、人類に対するのろいが無効になるのです。それは、そのような死に続いて、復活がなければならないことを意味しました。それは神のみが成せることでした。*イエスがエデンでの出来事の解決策そのものだったのです。*

アブラハムとの神の契約を覚えておられますか。神は超自然的に介入することにより、アブラハムとサラが息子を設けることを可能にされました。それがイスラエルという国の始まりでした。神は、バベルでお見捨てになった諸国をアブラハムの子孫の一人が祝福する日が来るとアブラハムに告げました。しかし、単なる人間がどうすればそのようなことができるのでしょうか。イスラエルの外の諸国を祝福するというその契約の約束を果たすアブラハムの忠実な子孫は、神しかありえません。イエスはアブラハムの子孫でした（マタイ 1・1、ルカ 3・34）。見捨てられた諸国の人々（「異邦人」）が神の家族に再び加わることができるように、彼らを他の神々から解放する約束の子孫はイエスだったのです（ガラ 3・16-18、26-29）。*イエスはアブラハムとの契約を成就するための解決策でした。*

さらにイエスはダビデの子孫でもあったため、彼は正当な王でした（マタイ 1・1、ルカ 1・32、ロマ 1・3）。イエスはダビデとの契約を果たすための解決策でした。正当な祖先を持ち、神に対して完全に忠実でした。神に背いたことは一度もありません。罪を犯したこともありません（二コリ 5・21、ヘブ 4・15、一ペト 2・22）。罪を犯したことがないという事実は、神の律法とシナイ山での契約の目的を完全に体現する模範でした。イエスは神の究極的な体現者でした（ニコリ 4・4、コロ 1・15）。神を体現する方法はイエスを見ればわかります。神は私たちがイエスの模範に従うことを望んでおられます（二コリ 3・18、コロ 3・10）。後ほど説明しますが、それは弟子であることも意味します（一ペト 2・21）。

神が人になるというのは理解が困難な観念です。神は一人ではないため、人になることができます。神は本質が同一である三つの人格が完全に統合されたお方です。聖書では、「父」、「子」、「聖霊」という用語を使ってこの三つの人格を区別しています。クリスチャンは、これを指して三位一体と呼んでいます。

「子なる神」がイエスという人間になられたのです（ヨハネ 1・1、14-15）。
神学者たちは、それを*顕現*と呼びます。これは神が「肉」となってこられたことを意味する用語です。イエスは、神が契約の成就を委ねることのできる唯一の人間となります。皆さんは、神は人々を神の家族に再び連れ戻すために御子イエスを遣わすことを「天地の造られる前から」からご存知であったことを覚えておられるでしょう（エペ 1・1-14、一ペト 1・20）。驚くべきことは、神が人間の家族を持てるように、その子が人間となって、苦難を受け、死ぬことを進んで受け入れたことです。以下は、その会話が記された新約聖書の一か所です。

> それだから、キリストがこの世にこられたとき、［父なる神に］次のように言われた、「あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった. . . .その時、わたしは言った、『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました』」（ヘブ 10・5、7）。

子なる神がイエスとして生まれることを進んで受け入れられたということは、幸いなことです。契約が危険に瀕していただけでなく、超自然界の反逆によってもたらされた悲惨な状態の克服も危ういところでした。それらの反逆のために神が人間となることが必要になったということを理解する必要があります。それは、神が人間の家族に合流されることで、霊の降臨のための準備が整うからです。

解決されるのは堕落の問題にとどまらない

神はイエスにおいて人間となられたため、死ぬことができます。死を打ち負かすことができるのは復活のみであるため、これは重要なポイントです。死んでいなければ復活はあり得ません。イエスは神でもあったため、ご自分を生き返らせる力がありました（ヨハネ 10・17-18）。イエスの死は神のご計画であったため、神は天地の造られる前から、イエスを死からよみがえらせることをご存知でした（使徒 2・23-24、32、3・14、10・40、ガラ 1・1）。

復活のために、私たちの神との距離は解消されました。死は克服されました。どちらもエデンでの反逆の結果でした。へび（サタン）の誘惑によって生じたアダムとエバの問題は、解決されたのです。イエスの死と復活によって罪の赦しと永遠の命が与えられると信じる者は、すべて永遠に神の家族となります（ロマ 4・16-25、8・10-11、10・9-10、一コリ 6・14）。

死から復活したイエスは、天に戻る（「昇天する」）必要がありました。イエスは昇天し、父なる神の右の座につかれました（マルコ 16・19、ヨハネ 20・17、コロ 3・1、ヘブ 12・2）。これは、やがて信者に内在するようになる聖霊を送る前ぶれでした（使徒

2・33、ロマ 8・9-11）。聖霊が来るためにはイエスが去らなければなりませんでした（ヨハネ 14・25-26、15・26、16・7、ルカ 24・49）。

聖霊の降臨は、エレミアとエゼキエルが語っている新しい契約の成就でした（エレ 31・31-14、エゼ 36・22-28）。墜落に打ち勝ち（ガラ 5・16-17）、イエスご自身の御業よりも「大きいわざ」を行うことになるのは聖霊です（ヨハ 14・12）。イエスは、その死と復活が新しい契約の成就のための鍵を握っていることをご存知でした。最後の晩餐でイエスが弟子たちに彼の血は彼らのために流される「契約の血」（マタイ 26・28、マルコ 14・24、ルカ 22・20）であるとおっしゃったのは、そのためです。イエスが昇天されると、聖霊が地上に降りられ、人類は墜落に対して無力ではなくなったのです。

要するに、人間の家族を持つことにかかわる問題、つまり果てしなく続く失敗と反逆を解消するためには、神が人間となり契約の条件をご自身で満たす必要がありました。

本書の冒頭で提示した質問を考えてみてください。神がお望みのこととは？神は*あなた*を望んでおられます。そして、死と罪という問題を解決し、人類との契約を成就して、あなたを永遠に連れ戻すためにご自身のひとり子をイエスとして地に送られました。神が人間の家族に合流されたのです。その他に道はなかったのです。福音が私たちの行動（神の愛と救いを獲得しようとする行動）とは無関係である理由は多数ありますが、これが最大の理由です。私たちの不完全な行動が十分であるなどと考えることは愚かなことです。救いを獲得することができるのであれば、イエスの来臨、死、および復活は必要ありませんでした。

サタンとその手下たち：馬鹿と大馬鹿（『Dumb and Dumber』という米映画のタイトル/邦題は『Mr.ダマ―』）

この物語には、もう一つ意外な展開があり、見落とすわけにはいきません。皆さんもこのことを考えたかもしれませんが、私も（何度も）考えました。イエスの死と復活が、へび（サタン）が行ったことの影響を覆し、この世に充満していた悪を妨げ、諸国の反抗的な神々の権限を奪うことを意味するとしたら、*サタンとその他の悪霊は一体どうしてイエスを殺したのでしょうか。*それは驚くほど愚かなことのように思えます。

考えてみてください。神のご計画におけるすべては、イエスの死にかかっていました。死を克服する復活があるためには死が必要だったからです。使命を果たさなければ、イエスは父なる神のもとへ帰ることはできず、墜落への対処のために聖霊の到来もあり得ないことになります。サタンとその他の暗闇の権力のすべてがイエスに手出ししなかったとしたら、*神のご計画は失敗に終わっていたはずです。*彼らは超自然界の馬鹿者たちでしょうか。

私は、このトピックについて多くを書いています。興味をそそられることです。新約聖書は、実際にこの質問に答えています。イエスが語られた良い知らせ（「福音」）について、パウロは次のように言っています。

> むしろ、わたしたちが語るのは、隠された奥義としての神の知恵である。それは神が、わたしたちの受ける栄光のために、世の始まらぬ先から、あらかじめ定めておかれたものである。この世の支配者たちのうちで、この知恵を知っていた者は、ひとりもいなかった。もし知っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったであろう。（一コリ 2・7-8）

「支配者」とは、パウロが別の箇所で霊界の悪のメンバーを指して使った言葉です（エペ 3・10、6・12．コロ 1・16）。要点は単純です。*サタン、悪霊、神に敵対する神の子たちは、神のご計画がどのようなものであるか知らなかったのです。*確かに彼らは、イエスがそのミニストリーを開始されたとき彼が誰なのかを知っていました。彼らはイエスを「神の子」および「いと高き神の子」と呼びました（マタイ 4・1-11、8・29、マルコ 1・12）。*旧約聖書では、エデンでの当初のアイデアと同様に、人間の家族が神とともに統治することを神が依然として望んでおられたことは明らかです。サタンとその仲間は、イエスがその計画に着手するために地上にいると推測することもできたはずです。しかしそのすべを知りませんでした。彼らの視点からは、彼を殺すことが理にかなっていました。しかし、それがすべての鍵を握っていたのです。神は彼らを出し抜いたわけです。*

神が超自然界の敵よりもどれほど賢明かを考えると、笑えてしまいますが、要点を見失わないようにしましょう。神が人類に合流されたのは、サタンや悪霊を馬鹿のように見せるためではありません。あなたを神の家族に加えたかったからです。そのほかに動機は必要ありませんでした。あなただけで十分だったのです。

しかし物語にはまだまだ沢山のことが含まれています。イエスはご自分の役割を果たされました。聖霊の役割について詳しく見ていく必要があります。それには単純ではあっても重要な理由があります。それは、神がその家族へ呼び戻すために多くの人々を募るために協力する私たちの役割に直接つながっています。

第 5 章

神が神の家族を追い求める

前章で説明したとおり、聖霊の到来は、エレミアとエゼキエルが語っている新しい契約の成就でした（エレ 31・31-14、エゼ 36・22-28）。信者一人ひとりにおける聖霊のミニストリーにより、邪悪に対する勝利が可能になります。これは、墜落した神の子たちにとっての侮辱と考えてください。しかし、それは超自然界のその他の一連の悪党に対しては、さらに直接的な攻撃であると言えます。

聖霊の到来により、神が見捨てた諸国を神によって任された神の子たち（仕えていた神から離脱し、墜落し、その支配下の人々を虐待した超自然界の存在たち）に対する潜入作戦が開始されました。

イエスはこれらすべてをご存知でした。私たちは、新約聖書で復活の後の書（使徒行伝の終わりまで、およびヨハネの黙示録など）を読む際、常にこのことを見落としています。

終末の始まり

イエスが昇天されたことで、聖霊の到来のご計画が実行に移されました（ヨハネ 14・26、15・26、16・7、ルカ 24・49）。復活後、昇天前のイエスはそのあと何が起こるかについて信徒たちに次のように語りました。

> そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。. . . ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。（使徒 1・4-5、8）

使徒行伝を読み進めば、上述の箇所でイエスが何を予測しておられたかすぐにわかります。イエスが去った後（使徒 1・9-11）、次の章では聖霊が輝かしい栄光の中に到来します。

> 五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわた

った。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。（使徒2:1-4）

この後の部分では、聖霊によってイエスの信徒たちはさまざまな言語で語ることができたことが記されています。彼らはイエスの物語、つまり彼の死と復活について世界各地からのユダヤ人に語っていたのです。「ユダヤ人」とは、旧約聖書の時代に捕囚によって世界中に分散した外国に居住するイスラエル人たちに与えられた名前です。イエスの信徒が語る教えを、各自が居住する国の言語で聞いたユダヤ人たちは、旧約聖書のイスラエル人の子孫でした。彼らは、古代イスラエル人の宗教暦の聖なる祭りの一つを祝うためにエルサレムに来ていたのでした。

イエスの信奉者が誰なのかを知っているエルサレムの人々は、公衆の面前で起こっていることが、酔狂であると思いました。これらの人たちが他国の言語で語ることができるなど、不可能なことでした。しかし、使徒ペテロがすべてを説明してくれました。それどころか、彼らを戒めました。

「ユダヤの人たち、ならびにエルサレムに住むすべてのかたがた、どうか、この事を知っていただきたい。わたしの言うことに耳を傾けていただきたい。今は朝の九時であるから、この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではない。そうではなく、これは預言者ヨエルが預言していたことに外ならないのである。すなわち、『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう。また、上では、天に奇跡を見せ、下では、地にしるしを、すなわち、血と火と立ちこめる煙とを、見せるであろう。 . . . そのとき、主の名を呼び求める者は、みな救われるであろう』。イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きなさい。あなたがたがよく知っているとおり、ナザレ人イエスは、神が彼をとおして、あなたがたの中で行われた数々の力あるわざと奇跡としるしとにより、神からつかわされた者であることを、あなたがたに示されたかたであった。このイエスが渡されたのは神の定めた計画と予知とによるのであるが、あなたがたは彼を不法の人々の手で十字架につけて殺した。神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせたのである。イエスが死に支配されているはずはなかったからであるそれで、イエスは神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに注がれたのである。. . . . このことは、あなたがたが現に見聞きしているとおりである。」（使徒2・14-19、21-24、33）

ペテロは、彼らが目の当たりにし、自分の耳で聞いていることは、神の聖霊の降臨による奇跡であることを告げていたのです。何が起こったのかを告げるために神がご自身の霊を送られたのことを告げたのです。メシアは来られ、殺され、死からよみがえられた、そして彼らはそれを真実必要があるのだと。ペテロの説明の結果は見事なものでした。三千人が「主のみ名を呼び」赦しを乞い、救われました（使徒 2・21）。

通常はこの時点で牧師は先に進み（というよりも、むしろ後戻りして）、十字架について語ります。十字架と復活によって、この瞬間に至っているわけなので、それはそれでよいのですが、この物語について*非常に*重要な何かが欠けているのです。

霊的潜入

使徒行伝 2 章で起こったことは、霊の降臨に関する出来事でした。霊の降臨は、神が人類に与えられた新しい契約、つまり一連の新しい約束の重要な要素でした。クリスチャンの多くは、これが、イエスを拒絶したユダヤ人だけではなく異邦人も取り戻すために、神が開始された戦いであったことを意味することを認識していません。*神は神の家族を追い求めておられ*、その子たちがどこに居住しているかは関係ありませんでした。神は彼らを追求し、見つけるのです。

今読んだ使徒行伝 2 章の部分は、神の霊は風と炎とともに来たと語っています（使徒 2・2-3）。旧約聖書では、火と煙は神の臨在の幻に共通する要素でした（出 13・21-22、エゼ 1・4、13、27）。ときには神は「激しい風」として来られました（イザ 6・4、6、エゼ 1・4、ヨブ 38・1、40・6）。ペテロのメッセージを聴き、霊の降臨をその目で見たたユダヤ人は、救いの日が来たことを知りました。

この場面で起こったことを考えてみてください。自分たちの祖先の分散先の外国に居住する三千人のユダヤ人が、宗教的な祭りの日にエルサレムに来ていたのです。彼らが霊の降臨を目撃し、メシアであるイエスについて、そしてイエスが行われたことについて聴いたのです。彼らはイエスを信じました。イエスの信奉者、つまりクリスチャンとなったのです。彼らはその後、何をしたと思いますか。

帰途についたのです。

このことが重要であるのはなぜでしょう。これで、失われ、見捨てられた諸国に三千人の伝道者が植えつけられたことになるからです。彼らは、他の神々にとらわれている敵対的な領域に配置された秘密諜報員のようなものでした。彼らは、神に属する人間の家

族のサイズを倍増するための神の最初の手段となります。彼らが第一波でした。使命は何だったのでしょうか。イエスがその使徒たちに与えられたものと同じ、大宣教命令です。クリスチャンはその聖書の箇所をよく知っています。

> それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、 あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。（マタイ 28・19-20）

ここでも何かが欠けています。これは大宣教命令ですが、第 18 節を省略したものです。私たちの伝道の使命について語るときに、通常省略される節です。次に、この箇所のイエスの御言葉のすべてを示します。重要な部分を太字にしてあります。

> イエスは彼らに近づいてきて言われた、「**わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。**それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。（マタイ 28・18-20）

気が付きましたか。イエスには天においても地においても、いっさいの権限があるのです。天における権限の部分は、わかりやすいと思います。イエスは昇天され、神の右に坐したのです（コロ 3・ 1 、ヘブ 12・2）。しかし、「地において」の部分はどういう意味なのでしょう。これは見逃しやすいのです。イエスの昇天は、当然ながら復活に続いて起こることですが、その時点まで地上で権力を握っていた支配権の終わりを意味したのです。それは誰でしょう。神が諸国を見捨てたときにそれらを任された、堕落した神の子たちです（申 32・8）

彼らにはここにいる権利はなくなった

これは、復活とイエスの昇天が神に反逆した神の子たちの支配権が無効になったことを意味します。彼らにはそれらの諸国の人々を支配する正当な権限はなくなったのです。メシアはアブラハムとダビデの子孫ではあっても、救いはイスラエル人（ユダヤ人）のみのものではありませんでした。イエスは万人のメシアでり、あらゆる諸国の正当な主でした。復活、昇天、そして霊の降臨は、堕落した神の子たちの終局の始まりを示します。彼らの正当性はなくなったのです。

新約聖書で復活と昇天が超自然界の暗闇の権力の敗北に関連付けられているのは、そのためです。神がイエスを「死人の中からよみがえらせた」（コロ 2・12）とき、私たち

の罪は赦された（コロ 2・13-14）だけではなく、「もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し」たのです（コロ 2・15）。「支配と権威」は、旧約聖書の時代に諸国の悪神となった、超自然界の堕落した神の子たちを指してパウロが使う言葉です（ロマ 8・38、一コリ 15・24、エペ 1・21、2・2、3・10．6・12、コロ 1・13）。

「支配と権威」は、敗北した暗闇の権力を示すためのパウロのお気に入りの表現です。死人からよみがえられたイエスは、「天に上って神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられる」のです（一ペト3・22）。神がイエスをよみがえらせ、神の右に座さしめたとき、イエスは「この世ばかりでなくきたるべき世においても」すべての支配、権威、権力、権勢の「上に」おかれたのです（エペ1・20-21）。きたるべき世においてイエスは、「すべての権威と権力とを打ち滅ぼして、国を父なる神に渡される」のです（一コリ15・24）

パウロは、諸国を任せられた、堕落した神の子たちの終局の始まりを示すものとして復活および昇天を理解していました。また、パウロがその考えを、見捨てられた神々の民である異邦人の救いに結び付けたのも、驚くことではありません。よみがえられたイエスと霊が、彼らを奴隷にして虐待していた暗闇の権力から異邦人を解放するのです。

バベルで諸国を分割した直後に神がアブラハムに出現されたことを思い出してください。神は、アブラハムに、彼とその子孫を通して、それらの諸国のすべてが祝福される日が来るとお告げになりました。異邦人のための使徒であるパウロは、その約束をよく知っていました。彼は、イエスは「異邦人もあわれみを受けて神をあがめるようになるために」、アブラハムと彼の子孫の受けた「約束を保証する」と記しています（ロマ15・8-9）。

それだけではありません。パウロは、神は決して異邦人を見捨てたのではないということを示すために、好んで旧約聖書を引用しました。神はずっと彼らをその家族に加えることを望んで来られたのです。パウロは、旧約聖書で「エッサイの根」（エッサイはダビデ王の父親）と呼ばれたメシアが「立って、もろもろの民の旗となり、もろもろの国びとはこれに尋ね求め」ることを知っていました。パウロは、見捨てられた諸国が真実の神を崇拝する日が来ることを知っていたのです（詩117・1）。

このプログラム、つまり霊の戦いの作戦は、神の霊が降臨し、3000人がイエスを信じたときに開始されました（使徒2）。それらの新しい信者たちは、それぞれの国へ戻りました。イエスの福音は、敵対的な超自然界の権力の支配下にありながら、諸国に浸透していきました。聖書はこれを神の「国」の発展と呼んでいます。永遠の命を与えること

のできない堕落した悪の神々に人々が背を向け、神の家族のメンバーとなるのに伴って、神の国が広がっていきました。片方の国は減退し、他方の国は拡張します。

したがって、神の国はある意味では既に地上にありますが . . . 別の意味では、まだ完全に存在するわけではありません。神が愛し求める子たちを追求することをやめることは一瞬たりともありません。神の見えない御手は、あらゆるところ、あらゆる状況にあり、神の家族を増やすために子たちに影響と力を与えています。神のご計画は、いつの日か完熟に達します。すべてが一巡します。物語の結末は、その作者がずっと心に決めておられたものです。

第6章

神は神の家族と共にある

前章の末尾では、明らかな点をいくつか確認しました。キリストは復活されました。彼の十字架で彼が成し遂げられたこととその復活を救いの唯一の方法として信頼を置いたすべての人々には、永遠の命が与えられます。しかし、私たちが*既に*キリストの御国のメンバーではあるものの、その御国は、*まだ*完熟した完全な状態としては到来していません。

サタンおよびさまざまな堕落した神の子たちの敗北についても、同じことが言えます。それは*既に*進行中ですが、*まだ*実現されてはいません。サタンには、神の御国のメンバーに対して何の権利も所有権もなく、死の権力もありません。私たちはイエスを通して神に属しています。イエスは私たちが復活してイエスおよび父なる神と共に永遠の命を生きることができるよう死を克服されました（ロマ6・8-9、8・11、一コリ6・14、15・42-49）。それでもなお、「空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊」（エペ2・2）は、今日も健在です。

同様に、暗闇の権力も王座から降ろされました。しかし、彼らはまだ降伏していません。抵抗し、勝ち目のない戦いを戦っているのです。神は、イエスを通して神から与えられる救いを受け入れる人すべてを、「やみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった」（コロ1・13）のです。神の国の拡大に伴って、闇の国が減退していきます。

将来に心を向ける代わりに、私たちはこの世に依然として存在する悪と苦しみに心を集中してしまいがちです。イエスが「わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられた」（ガラ1・4）ことを覚えておくことが困難なこともあります。

聖書はこのジレンマを責めていません。それについて正直に書かれています。「わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。. . . .被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである」（ロマ8・18-21）。

物語の驚くべき結末

物語の残りの部分については、驚くべき結末に焦点を当てたいと思います。壮大な物語のどれにも記憶に残る結末があります。聖書の物語も例外ではありません（ハープが雲などを予想していたとしたら、期待外れになりますが）。

私たちは、聖書の最後の出来事を、私たちが*得ること*に関連して処理する傾向があります。たとえば、死ではなく、永遠の命を与えられます。それは嬉しいことですが、「永遠の命」といってもよくわかりません。それはその継続時間のことを示していて、質については語っていません。

永遠の命の質は、新しいグローバルなエデンでの人生として物語の終結を考えたときに、浮き彫りになります。聖書の最後の書であるヨハネの黙示録では、エデンのイメージで物語が完結されています。そこには神がおられます。天国は地上に戻ってきます。そこにはイエスがおられます。命の木があります。このエデンは、元のエデンに勝ります。悪は自然な経過をたどって終わり、世界に展開する反逆はありません。そのため、被造物は完全に最適な状態です。地球、動物、人間は病も死も経験することはありません。捕食も暴力もありません。私たちがこれまでに経験したことのない世界です。

「エデンの御使い」が、聖書自体が物語のクライマックスで強調していることに近い経験をさせてくれます。前述したローマの信徒への手紙8章の部分は、神のご計画の真の頂点「神の子たちの出現...神の子たちの栄光」について理解するために私たちの考え方を少しだけ調整してくれます。そうです。被造物は新しくされることをうめき声をあげながら待ち望んでいますが、救いは神の人間の家族の栄光に関連付けられています。

言い換えると、*私たち*は神が行われてきたことの終局なのです。神の子たちとしての私たちの地位は、神の臨在に永久的にふさわしいもの、そして神の前に存在するのにふさわしいものとなり、それが聖書の物語の中心なのです。私たちが*どこ*を住処とするかは単なる景色にすぎません（壮観であることは間違いありません）。ヨハネの黙示録に出てくる新しいエデンについての最後の夢では、次のように最後のシーンの記述が開始されており、このポイントが明らかになります。

> わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、 4人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。」

永遠のアイデンティティ

「神の子たちの出現を待ち望んでいる。. . . .神の子たちの栄光」は、私たちがいつの日か変えられてイエスににたものにされるのだということを、別の言い方で示しています。使徒ヨハネが述べたように「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」（一ヨハ3・2）ということです。これと同じ考えは、他の方法でも表現されています。

> 神はあらかじめ知っておられる者たちを、更に御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定めて下さった。それは、御子を多くの兄弟の中で長子とならせるためであった。（ロマ8・29）
>
> しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。 彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう。（ピル3・20-21）

私たちの宿命は、神の究極的なかたちであるイエスに似た完成した神の体現者となることです。この働きは既に進行中です。「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」（二コリ3・18）。聖書は、私たちの物語を復活とトランスフォーメーションで結んでいます。私たちは、復活し、永遠の命と、イエスの復活後の体と似た栄光の体をいただきます。パウロはそれを「天に属するからだ」と呼んでいます（一コリ15・35-58）。

わたしたちの最終的な運命と栄光に関する私のお気に入りの箇所は、さらに曖昧な表現をしています。ヘブル人への手紙のシーンの一つで、イエスが私たちを神に、そして神に私たちを紹介する場面です。イエスは、神の前、および教会つまり神の天上の子たちの前に立ちます。私たちを兄弟姉妹として持つことを恥とされないということを大胆に告白され（ヘブ2・11）、神と超自然界の家族のメンバーにこのようにおっしゃいます。「わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、教会の中で、あなたをほめ歌おう。. . . 見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子らとは」」ヘブ2・12）。これがあなたの究極的の宿命です。すなわち、神の家族の永遠かつ正当なメンバーとなるのです。最終的には、あなたは神の家族に*属する*のです。それが神が初めからお望みだったことです。*それ*が被造物全体が待ち望んでいることです。

永遠のパートナーシップ

新しく造られた世界（天国）での生活がどのようなものなのかに関して人と話したことがありますか。終わりのない礼拝、またはイエス様との終わりのな質疑応答セッション、あるいは栄光を得た教会の交流会として多くの人がそれを語っているのを聞いたこともあります（最後に挙げた教会の交流会というのは、私のような内向的な人間には恐ろしいことです）。

完全なエデンでの生活を想像することで、いくつかのことは推測できますが、聖書はその経験についてあまり語っていません。しかし、聖書が実際に語っていることは、上述した種類の推測を否定します。イエスへの信仰を最後まで持ち続け「勝利を得る者」は、「諸国民を支配する権威」を与えられます（黙2・26）。イエスは「わたしと共にわたしの座につかせよう」とおっしゃっています（黙3・21）。私たちはいつの日か「御使をさえさばく」のです（一コリ6・3）。

これらは何を意味しているのでしょうか。*現在*諸国を支配しているのは誰かを問うことから始めることができます。その答えは、バベルで諸国を任された堕落した神の子たちです。言い換えると、現在の時点では諸国は神によって完全に（ほとんどは）取り戻されていません。神の国の拡張は、説明したように漸進的なプロセスです。つまり、「既に」開始されていますがまだ完結していません。終末の日にこのプロセスが完結すると、信者は「御使をさばきます」。つまり私たちは、堕落した神の子たちに取って代わることにより、彼らに判決を下すのです私たちは、私たちの王であり兄弟であるイエスとともに諸国を支配します。

この観念について語るときは、必ず次のような質問が投じられます。私たちにはどのようなタスクが与えられるのか。一部の信者は他の信者よりも多くの権限を持つのだろうか。私は別の信者の上司になるだろうか。どうすれば私たち全員が支配者になれるのですか。私たちの仕事によって誰が誰の上に立つかが決まるのですか。

これらの質問が、不完全な、*堕落した世界に住む人々*から出るのは無理もないことです。私たちの観点は、私たちの経験する欠点のある、傷の付いた世界に染まっているのです。しかし、聖書では私たちの最終的な宿命は雇用関係として描かれていません。父と子の関係です。神の子たちである私たちは、人間の兄弟か天上の兄弟かにかかわらず、兄弟たちと共に、神と協力するのです。神の意図どおり一緒に神を体現します。そして私たち全員が尊敬する兄はイエスです。神の子たちすべてが、父の究極の体現者であるイエスのようにされるのです。

要するに、新しいエデンにおける私たちの支配で重要なのは階層ではなく、*家族的なパートナーシップ*です。家族全員が栄光を与えられると、監督上の階層はなくなります。

正直に言うと、私たちはこのようなことを想像することができないだけなのです。腐敗した世界に住んでいるのですから。神は私たち、そしてあなたが神の意図どおりに神と一緒に生きることを経験することを望んでおられます。その日はいつか来ます。聖書は次のように言っています。

> 「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、
> 人の心に思い浮びもしなかったことを、
> 神は、ご自分を愛する者たちのために
> 備えられた。」（一コリ 2・9）

サマリーとプレビュー

聖書が実際に何を語っているかがわかりましたが、それは驚くべき物語です。

この後どうすればよいのかと思っておられることでしょう。この物語の観点から考えるべき重要な概念がいくつかあります。

私はアブラハムについて次のように前述しました。

> 使徒パウロは、信仰に基づく忠誠の例としてアブラハムを使っています（ロマ4・1-12）。アブラハムは規則に従う*前に*、神を信じ、神に受け入れられたのです。つまり実際の規則とは信仰を示すことだったのです。規則が信仰に取って代わったのではありません。信じること（信仰）は不可欠要素でした。その信仰に忠実であること、つまり神への忠誠については後で検討します。今日、私たちはそれを弟子として生きることであると言います。信仰と忠誠はそれぞれ異なるものです。関係はありますが、どちらも他方に代わるものではありません。救いと弟子についても同じことが言えます。

上記は、これから残りの部分のロードマップとなります。「信仰による忠誠」という言葉をガイドとします。説明します。

「信仰による」

次のセクションでは、福音について説明します。福音が何であるのか、どういう意味を持つのかについてお話しし、聖書に従って福音の内容を説明していきます。それは重要なことです。福音を**信じること**が神の家族のメンバーになる方法だからです。それは私たちが救われるための方法です。救いは信仰によります。それが神による救いの提供方法です。つまり私たちが神の家族に属するために神が設けてくださった道です。そのすべてはイエスが行われたことを中心としています。

「忠誠」

この本の末尾のセクションでは、弟子訓練について学びます。「弟子」とは「信奉者」を意味する言葉です。イエスの弟子であることは、彼に従うこと、つまり彼に倣うことを意味します。イエスは「わたしを見た者は、父を見たのである」とおっしゃっています（ヨハネ14・7、9）。イエスは、彼が神を愛していたこと、そして彼の父とそのご計画に忠実であったことが明らかな生き方をされました。弟子として生きることによって、

私たちはイエスを愛すること、そして神を愛することを示すのです。それは*神の愛を獲得するためのものではなく*、私たちを救うための神のご計画を成就されたイエスに対する感謝を示すためのものです。*それは私たちの救いのためにイエスが行われたことに代わるものでも、それに追加するものでもありません。*私たちの救いのためにイエスが行われたことを信じていることを私たちが示すためのものです。

前述したように、信仰と忠誠は関係はしていますが、明確に異なります。片方が他方に取って代わることはできません。救いと弟子についても同じことが言えます。福音は救いのためのものだと信じています。私たちは救い主の弟子として生きることで、彼に忠誠を示すのです。

第II部：福音

第 7 章

福音とは？

この時点でこの質問をするのは、奇妙だと思われるかもしれません。聖書の物語、つまり神が私たちをご自分の家族に加えることを望んでおられるという物語を、時間をかけて吟味してきたところです。私たちは、福音を信じることによって神の家族に加わります。

私は、教会に通う方の多くが福音を実のところ理解しておられないということを発見しました。明確にそれを述べることができない方もおられます。理路整然とそれを表現することができる方でも、真の意味でその単純性に自分をゆだねることに苦労しています。心の中で、永遠の命を得るために必要なのは福音だけであるということを実際に信じることに苦悩します。

私が何を言っているのかと思っている方もおられるでしょう。しかし、私が意味することを説明していくうえで、あなたは自分自身または知り合いが以下に書かれていることに当てはまるとううことに気付かれると思います。

まず、福音を定義することから始めましょう。明確にするために考える必要のある質問をいくつかしながら進めていきます。また、何が福音ではないかについて検討することも重要です。この会話のその部分に到達したら、前述した苦闘の意味がわかると思います。

福音とは？

「福音」という言葉の意味を定義するのは、比較的簡単です。聖書で使われている「福音」は、救いのメッセージを指します。英語の「gospel」は、良い知らせをもたらした人に与えられる報酬のことを指すギリシャ語（新約聖書の原語）からの訳です。そのため「福音」という言葉は、「良い知らせ」（救いのメッセージに関する良い知らせ）と結び付けて使われています。

このことを考えてみましょう。何か一つ学んだような気がするかもしれません。学んではいますが、実際に知る必要のあることは学んでいません。ある言葉を*定義*できるようになったというのは嬉しいことですが、実際には、救いのメッセージの*内容*については

何も言っていません。「福音」が指すものが何であるかを定義しましたが、福音そのものが実際に何なのかは定義していないのです。

ですから、福音の*意味*について検討しましょう。神の救いのオファーの*内容*とは何でしょうか。良い知らせの*詳細*はどのようなものでしょう。そしてそれは*なぜ*良い知らせなのでしょうか。この言葉は新約聖書に百回近く出てくるため、それを解き明かすことができるはずです。

新約聖書を書いた人たちのうち、福音メッセージについて語るのが最も多いのはおそらく使徒パウロでしょう。彼は、イエスについて教えを延べ伝えるためのメッセージに「福音」という言葉を使っています。

> 兄弟たちよ。わたしが以前あなたがたに伝えた福音、あなたがたが受けいれ、それによって立ってきたあの福音を、思い起してもらいたい。. . . すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、（一コリ15・1-4）

パウロは他の箇所で彼のメッセージである福音を定義しています

> キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び別たれ、召されて使徒となったパウロから-. . 御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである。わたしたちは、その御名のために、すべての異邦人を信仰の従順に至らせるようにと、彼によって恵みと使徒の務とを受けたのであり. . . （ロマ1・1-5）

福音（良い知らせ）の内容がこれらの箇所から明確に浮き上がっています。福音の要素は次のとおりです。

- 神がその御子をおつかわしになった。. .
- その御子はダビデの家系であった。. .
- 彼はイエス・キリストという人として来られた。. .
- そのお方は私たちの罪のために死なれ、. .
- 葬られ、. .
- 死人の中からよみがえられた。. .

これらの項目は、良い知らせの*内容*です。これらの項目について、前にお話しした物語の大局的な見方から、もう一度説明します。

> 神の御子が人間となられました。私たちの罪によって、私たちが神の家族に属することが阻まれることがなくなるように、十字架上で苦しみ死なれました。彼は死人の中からよみがえられたため、私たちも死を克服して彼の父である私たちの父、唯一真実の神と永遠に共に暮らすことができるのです。

このことをもう少し考察してみましょう。これが良い知らせであるとしたら、それはなぜ*良い*のでしょうか。理由は多数あります。救いは私たち自身の能力に依存しないため、良い知らせなのです。これらの箇所には、あなたの素晴らしい業績について、または逮捕記録がないことなどについて何も言及されていません。福音の内容で重要なのは、あなたの過去の行いやこれからの行い、あるいはしなければならないことではなく、誰か他の人があなたのために行ったことです。完全な人は誰もいないため、これは私たち全員にとって良い知らせなのです。誰も神を常時喜ばすことはできません。自分の力で神の家族となって暮らし、神の名で呼ばれるのにふさわしい人になることは誰にもできません。*私たちは神に受け入れられる者にされる必要があります。*福音の内容は、その過程を説明しています。

パウロは、良い知らせを人々に知らせる彼のミニストリーを「信仰の従順に至らせる」と表現しています。彼はそのメッセージを聴いた人々が彼が言ったことを「しっかりと守り続ける」ことを望みました。福音にはどのように「従う」のでしょうか。バプテスマを受けることですか。お金を寄付することですか。正しい振る舞いをすることですか。いやな人間でないことですか。貧しい人々を助けることですか。これらはどれも価値あることですが、正解ではありません。神は「信仰による従順」をお望みです。福音は、信じることによってそれに従うのです。

パウロが「理解による従順」とは言っていないことにも気付きましたか。神がイエスにおいて人となられたことなどを完全に理解することはできなくても構いません。神は、私たちがすべて解明してから最終試験を受けるようなことを要求しておられるわけではないのです。神は*信仰*をお望みです。これらのことがなぜ道理がかなっているかを理解するのは、後からでもいいのです。

福音の内容は、神はあなたを赦して、神の家族内に永遠の場所を下さるという神の招きなのです。これは神の愛と親切を示しています。聖書ではこれらの言葉の代わりに「めぐみ」という言葉が使われていることがあります。神より大きい権力はないため、神は誰かに強要されて救いをオファーされているわけではありません。神に圧力をかける者はいません。神があなたを救へと招かれるのは、あなたをお望みだからです。あなたに要求されることは、信じることだけです。

*それ*が福音の良い知らせなのです。

福音はなぜ必要か？

このことは既に私がお答えしたと思っておられるかもしれません。回りくどい方法で、ある程度はお答えしましたが、クリスチャンの間での私の経験を踏まえると、私は率直にお話しする必要があります。

福音はなぜ必要なのでしょう。それがなければ、神との永遠の命の希望はないからです。ゼロです。罪のために私たちは神から疎外されているのです。福音を信じることがその救済策です。

聖書は、私たちの苦境をさまざまな方法で記述しています。イエスは「失われたものを尋ね出して救うため」に来られたとおっしゃいました（ルカ 19・10）。私たちは生来「罪過と罪とによって死んでいた者」（エペ 2・1、5）であり「不信心な者」（ロマ 5・6）なのです。私たちは神の「敵」（ロマ 5・10）であったため、「神のいのちから遠く離れ」（エペ 4・18）、神に「敵対」（コロ 1・21）しているのです。事態は深刻です。

ここまで見てきた聖書の物語は、私たちが私たちである理由を説明しています。私たちは、神の家族に生まれていません。部外者です。それでも神は私たちがその家族となることをお望みです。神の特質を欠く私たちは、知力と自由を乱用して、欲しいものを手に入れ、その過程で他人を傷つけることもよくあります。自己破壊的な生き方をしています。神を体現せず神の律法を破るとき、他人を侵害したり操ったり虐待したりするとき、私たちは罪を犯します。私たちは生来、自己陶酔した反逆的な罪人なのです。「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなって」いるのです（ロマ 3・23）。

これを読んで落ち込んだり、憤慨したりしがちな私たちですが、福音の物語の良い知らせは、神はこれらのことをすべてご存知のうえで私たちを愛されたということです。また、この良い知らせは、別の理由で価値があります。意外な理由かもしれません。それは、この良い知らせによって、福音が他の宗教での救いに関する教えとまったく異なるものとなっていることです。他の宗教はどれも、罪が問題であることを否定するか、儀式の反復、祈り、宗教行事の厳守などの人間の行い（能力）、つまり良い人であることが解決策であると言います。

率直に言うと、人間の状況について、および人間がそれに対処することができないことについて、正直なのは福音のみです。他の宗教は、事実上あなたに嘘をついています。

神からの距離の問題をあたなが自分で修正できる、または問題はないと言います。神が解決策を提供する必要があったこと、そして神がそれを提供されたことを語っている福音のみが真実です。福音は透明で正直です。それは、苦痛ではあっても、真実を語っています。それは愛を示します。嘘をつくことは愛ではありません。

救いに他の方法はあるのか

これはだいたいお答えしましたが、別の角度からこの質問にアプローチしてみたいと思います。

神は赦し、救い、および神との永遠の命を無償で提供されます。それは私たちが獲得するものでも、受けるに値するものでもありません。事実、それは獲得できず、それに値することもできません。要求されるのは信じること、または信仰です。つまり神の約束とイエスが行われたことの完全性に信頼を置くことです。

しかし、福音を信じることとは、救いに関する他の教えや理念を*信じない*ことを意味します。聖書では、救いの道は他にないと言っています。考えてみてください。あなたが天国に行くための方法が他にあったとしたら、十字架上であれほど残虐な死を遂げるために御子であるイエスをなぜ父なる神が遣わすでしょうか。御子は人になる必要があり、死は克服されなければなりませんでした。これが唯一の方法だったのです。そして神のこのご計画を信じることのみが救いの道です。イエスによる以外に救いはないのです（使徒 4・12）。イエスご自身も次のように単刀直入に言っておられます。「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ 14・6）。

曖昧な表現はありません。イエスが行われたことによらなければ、神の永遠の家族のメンバーとなれる人はいません。福音は、他の信仰に追加するものではありません。福音は排他的です。福音を信じることは、他の信仰に*背を向ける*ことを意味します。それが聖書で悔い改めと呼んでいることの一局面です。他にもありますが、それらについては次の部分で取り上げます。

福音ではないもの

福音の内容について検討してきましたが、福音はイエスが私たちに代わって成就してくださったことに関するものであることは明らかです。永遠の命、救いは、イエスが私たちに代わって成就してくださったことを信じる者に与えられます。

私たちの文化は、この明確な事実を混乱させようとします。代わりとして自己改善と漠然とした「精神性」を提供します。しかし、福音に関する聖書の説明は、そのようなも

のを受け付けません。福音（および救い）は、自己啓蒙や、自己発見の過程で「自分を見つめる」こととは関係ありません。福音は霊的な寄せ集めからアイデアを検討することではありません。それらのアイデアの検討は知的または心理学的な努力および活動です。福音ではありません。

こういった種類の「代替的福音」は、検知して排除するのは簡単です。それよりもはるかに困難なハードルがあり、多くの人々にとって神が提供する救いの単純さを信じることの妨げとなっています。

教会であなたが出会う多くの人は、福音と闘っています。「功績の罠」に陥っていることが理由です。あなたまたはあなたの知り合いは福音という言葉だけでなく、その意味の内容まで定義することができるかもしれません。しかし、イエスがあなたのために行われたことを信じることが、永遠の命に必要なすべてであるという考えが、正しいとは思えないのです。私たちはきっと何かをしなければならない。そうでなければ、どうして私たちが永遠の命を受けるに値するのでしょうか。

聖書の物語と福音の内容を理解すれば、私たちは神が提供しておられることに値しないことがすぐにわかるはずです。多くの方々にとってはこのことを受け入れるのが困難なのです。私たちは自分が持っているものを自分で手に入れたと感じたいのです。施しの対象にはなりなくないのです。何かいいものを少しでも努力せずに手に入れるのは間違っているように感じるのです。

罪悪感はさらに微妙に考えをゆがめます。福音を無条件の贈り物としてみる能力を麻痺させます。罪悪感は、自分が贈り主に対してどこかの時点で何かしてあげたために、自分はその贈り物に値すると断定することで、それを正当化します。自分を納得させることができない場合は、事後にその贈り物に値すると感じるために何かを行います。

罪の意識は、福音に表された神の愛を見えなくします。最終的に、私たちはこの考え方がどれほど自己中心的であるかを理解する必要があります。

苛酷かもしれませんが、聞いてください。あなたに価値があると誰かに思ってもらうために努力するには、自分に注意を集中する必要があります。他の人にあなたがその注目と愛に値すると思ってもらうことが目標であれば、別の人に注意を集中しているわけにはいきません。私たちは自分について満足していたいものです（自分は合法的に何かを受け取る価値のある者だと思っているため、自分のものでないものは受け取らないなど）。また、他人にもそのように思ってもらいたいと思っているのです（他人が何かをくれるとしたら、私たち自身が行ったことによって彼らが私たちに好意をもったためと思いたいのです）。

福音はこれらを取り除きます。私たちの真の姿をさらけ出し、裸の謙虚さを要求します。すべての注意を神とイエスに集中することを求めます。福音が多くの人々にとって受け入れ難い事実であるのはそのためです。私たちは何も手柄にできません。

つまるところ、福音はあなの行いに関わるのではなく、既に在るあなたに関わるのです。あなたは人間であり、最初から神の愛とそのご計画の対象でした。それにはあなたの業績など必要ありません。

私たちは堕落した世界に住む罪人であるため、自分を完全に奥の奥まで知り尽くしたら誰も愛してくれないだろうという考えにはまっています。その結果、私たちは神が愛してくださっているなどと想像することもできません。私たちについて神が気付かないことは何もないわけですから。神は私たちのすべての考え、言葉、衝動、そして行いをご存知です。自分の中に罪悪感ができ上り、条件付きの関係が平常とされる中で、福音に描かれた神の偏見のない愛は受け入れ難いものです。私たちの観点から見ると、道理にかなっていないのです。

この時点で、真の福音を聴き、誠意をもって受け入れた方々が実際は救われていないと言っているわけではないことを申し上げておきましょう。私は*彼らが信じ*、神の家族に加わったと本当に信じています。

私が描写しているのは、それらの信者の多くが送っている死ぬほど退屈な内面生活です。彼らの罪悪感は、福音の愛とめぐみを功績中心、能力ベースの経験にすり替えてしまいました。彼らが福音を理解して信じたときのように今でも神から愛されているか、と疑うようになります。彼らは、信者として犯した罪を、神の気持ちが自分に対する熱意を欠いたり、曖昧であったりする理由として見ています。神の期待に沿うことはできないと確信しており、自分が「十分に信じているか」、信じていると思ったが実際には信じていなかったのかもしれないなどと考えます。

多くの誠実なクリスチャンは、福音のためではなく、彼らの罪悪感が福音の明確さをゆがめてしまったために、苦悩と挫折の人生を送っていることは、悲しい真相です。聖書を読むとき、彼らに見えるのは自分の罪と失敗ばかりです。説教はどれも起訴状のようなものです（それを主に意図して説教する牧師は恥ずべきです）。物語の驚くべき事実は、失われ、忘れられてしまいます。

救いは、功績とは関係ありません。過去にも今後もそのようなことはあり得ないのです。神のレベルに自分を置くため、神の御前に出るのにふさわしい者になるために私たちができることは何もありません。*私たちには神の完全な本性が欠けています。*神のようであり、その似姿に造られれてはいますが、定義上、私たちは神よりも低い存在であり、

神はそのことをご存知です。神の解決策がイエスであって*あなたではない*のはそのためです。

私たちが、これをしたり、あれをしなかったりすることで、そのギャップや空虚を埋められると考えるのはばかげています。あなたが失敗しても、神があなたについてこれまで知らなかった新しいことを学ぶことなどありません。ずっとあなたを愛してこられ、今その場所であなたを愛しておられます。ローマ人への手紙 5 章 8 節は、それをうまく表現しています。「まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。」お気付きですか。*私たちがまだ罪人であったとき*。あなたを愛するように神を促すために十分なレベルの功績をあげる必要などないのです。このことをよく考えてみると、とても良いニュースです。神はあなたの行動について間違った期待を持っておられないため、あなたにがっかりすることは決してありません。神はずっとあなたを愛してこられたのです。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ 3・16）

これは二つの考えに要約することができます。救い（神の家族のメンバーシップ）は獲得することはできません。それは信仰によって受け入れるものです。神は親切であり愛情あふれるお方であるため、それを提供してくださるのです。そのほかに理由はありません。

第 III 部：イエスに従う

第 8 章

弟子訓練とは？

福音には人間を変革するという意図があります。誰でも福音を受け入れたならば、「その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」（二コリ 5・17）。それは実際にはどのようなものでしょうか。

この質問への答えを覚えておられるでしょう。弟子とは信者、具体的にはイエスの信者であると前述しました。「従う」とはイエスに倣うまたはイエスを体現することとして定義付けました。「主と同じ姿に変えられていく」ことが私たちの最終的な宿命です（ロマ 8・29、二コリ 3・18、コロ 3・10）。

私たちがイエスに倣う動機は、天国に行くために神に私たちを愛*させる*ためではありません。神は私たちが「まだ罪人であった時」（ロマ 5・8）、そして神の敵であったとき、既に私たち一人ひとりを愛しておられたのです。福音を信じたときに神の家族の一員となり、天国に行くのです。自力では私たちは失われ、神から遠く離れた状態（エペ 4・18）であり、救い主が必要です（ルカ 19・19）。私たちが*そのような状況*にあったときに、神は私たちを愛してくださいました。私たちが行いを改めるまで愛を保留するようなことはなさいませんでした。

私たちがイエスを模倣する動機は、最終的に救われるために神の愛を*維持する*ためでもありません。自力で達成できないことは、自力で失うこともできません。救いは、私たち個人の価値や功績とは無関係です。しかし、イエスが私たちのために成されたこととは大いに関係があります。「神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである」（二コリ 5・21）。救いについて、私たちの手柄とできることは何もありません。すべてイエスが成就されたことです。

弟子について明晰に考える

これらのことがすべて弟子訓練にどのように適用できるかについて慎重に考える必要があります。

前述した「功績の罠」のため、救いと弟子であることは同じではないことを明確に理解する必要があります。多くの信者は無意識のうちに、罪の意識から自分の業または功績

を福音に追加し始めます。その結果は、イエスが私たちに望まれる豊な人生（ヨハネ 10/10、二コリ 1・5、エペ 3・20）ではなく、霊的な囚われです。

救いは、福音を信じたときに神から私たちに与えられる贈り物です。私たちが受けるに値しないものです。私たちの罪および神への敵意にかかわらず神はそれを提供してくださいます。弟子訓練とは、福音を信じた*結果*として私たちが行うことです。私たちがイエスに倣うのは、彼と神への愛を示すためです。イエスは神の究極的体現者でした。私たちも同様な生き方をしたいのです。

イエスのように生きること、つまり聖なる一生（信仰生活）を送ることには多くの理由があります。神の愛を獲得することはそれには含まれていません。救いには私たちが支払う代償はありません。福音を信じるすべての者に無償で提供されます。しかし、弟子として生きることには何らかの代償があります。イエスに従うことは簡単ではないことが多いのです。弟子であるためには、神を愛し称賛することや、神が愛しておられ、福音を通して家族に加えたいと願っておられる他人を神を体現する仲間として扱うことなどを選択しなければなりません。

イエスご自身の生涯を考えてみてください。たやすいものではありませんでした。聖書に書かれているとおり、「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」（一ペテ 2・22）。イエスは犠牲的な生涯を送られました。神を第一に、その次に「隣人」（その他すべての人々）を優先されました。

> 「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている。」（マタイ 22・36-40）

イエスは、神から愛されるため、または神に喜ばれるためにこのようは生涯を送られたのではありません。契約を成就するためにイエスが来られ、「わざを行われる」よりもずっと前から、神は既にイエスを愛しておられました。神は「天地が造られる前から」イエスを愛しておられました（ヨハネ 17・24）。

イエスに従うことは困難なこともあります。初めて信じたときにイエスのようである人はいないため、また常時イエスのように生きることは困難なため、弟子は各自の行いに関して心が変えられる必要があります（聖書ではそれを「悔い改め」と呼びます）。私もそうでした。やめなければいけないことや始めなければいけないことがありました。

しかしそれらは神から愛されるためではありませんでした。神は既に私を愛してくださっておられたからです。

イエスが行われたことは、神を愛したが故です。私たちもそれに倣う必要があります。イエスは、彼と神のご計画を他者が信じることができるように、そのような生き方をされたのです。私たちもそれに倣わなければなりません。イエスは地上に置かれた理由、つまり私たちに代わって恐ろしい死を遂げられることをご存知でした。しかし、神のご計画と力を信頼しておられました。彼は死人の中からよみがえり、再び父と一緒に生きるのです。

私たちもそれと同じ永遠の視点を持たなければなりません。この世は私たちの本当の住処ではありません。それは一時的なものです。次に来るものは永遠に続きます。イエスが行われたことのおかげで、私たちはこの世を後にして、その世界での永遠の命を継承するのです。私たちの人生の目的は、救ってくださった方への忠誠と感謝を表すこと、そして他の人々も神の家族に属することができるように手を差し伸べることであるべきです。

失敗することも、罪を犯すこともあります。神はそれは承知されています。人間をよくご存知なのです。私たちが誰であるかをご存知です。それでも、神の愛を返すために何かをすることに私たちが何の興味もなかったときから、既に神は私たちを愛しておられました。私たちが神の敵であったときから、「まだ罪人であった時」（ロマ５・８）から私たちを愛しておられました。私たちが神の家族に属する前から愛してくださいました。神の家族に属した私たちを愛さなくなったり、愛情が減ったりするはずがありません。罪を犯し、失敗しても、赦してくださいます。私たちがそれを信じて、イエスを模倣することにすぐに戻ることを望んでおられます。

イエスのように生きるのはなぜか

イエスのように生きる理由は多数あるが、*神の愛を獲得することは理由には含まれない*と先ほど申し上げましたが、それらの理由とは何でしょう。

まず、罪は自己破壊的で、自分だけでなく周囲の人にまで害を及ぼします。私の家族や親戚の中でも、アルコール依存症、薬物中毒、および不貞の影響が見られます。それらが生活を破壊するのは明らかです。快楽と自己陶酔のためにこの世や不信仰の文化が提供するものは、一時的なもので永続的な価値はありません。文化は、私たちの決定がもたらす悲惨な状態にかかわらず、自分自身の「幸せ」を満足させるために「人生を生きる」ように私たちに教えます。永遠の視点は提供されません。文化は、今のみに生きるよう招きます。天職などはありません。聖書はこの考え方をあらわに示しています。

> 世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである。世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、永遠にながらえる。（一ヨハ 2・15-17）

第二は、多くの意味で最初の点と反対ですが、神を敬う生活をすることは、他人に恵みをもたらします。実のところ、そのような生き方および考え方は、他の人々を祝福するか、苦しめるかのどちらかです。人々に仕えたイエスは、彼らにとって神の恵みでした。自己満足と自己陶酔によるライフスタイルを求めても充実感は得られません。スーパーマーケットにある大衆紙はどれも、その現実の例を示しています。人々に恵みをもたらすことは、イエスを反映するだけでなく、個人の充実感にもつながります。他の人々に仕えて生きるとき、あなたの生涯は重要になります。

第三に、神を敬う人生により、私たちは福音の着実な証人となることができます。人々が私たちの生活を見ても不信仰な世界と区別できず、他の人々に仕えて生きる人生のように見えない場合、彼らは福音を信じられるとは思わないでしょう（福音について彼らは少なくとも、混乱するでしょう）。私たちの人生/生活がイエスのメッセージとは矛盾するものだと思うでしょう。言い換えると、人々は、私たちが、彼らを愛しているお方であると言っているイエスを反映する生き方をしているだろうと期待します。これは不合理なことではありません。そうでなければ偽善です。偽善を良いという人は誰もいません。

神を敬う生活は、天国での居場所を確保するためのものではありません。沢山の「霊性ポイント」を稼いで神に恩を売るといったことでもありません。聖書の次のような箇所では、まったく異なることに焦点が置かれています。

> 兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。（ロマ12・1-2）

> しかし、神のゆるがない土台はすえられていて、それに次の句が証印として、しるされている。「主は自分の者たちを知る」。また「主の名を呼ぶ者は、すべて不義から離れよ」。大きな家には、金や銀の器ばかりではなく、木や土の器もあり、そして、あるものは尊いことに用いられ、あるものは卑しいことに用いられ

る。もし人が卑しいものを取り去って自分をきよめるなら、彼は尊いきよめられた器となって、主人に役立つものとなり、すべての良いわざに間に合うようになる。（二テモ2・19-21）

そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。（ピリ2・1-8）

これらの箇所から、私たちがどのように生きるべきかについてだいたいのことがわかりますが、弟子訓練に関する具体的なことはわかりません。弟子はどのような生活を送るのでしょうか。弟子は何をするのでしょう。幸い、イエスと、最初のクリスチャンであった十二使徒がそれを明らかにしています。イエスは、彼がなさらないことをその信奉者にするように命じることはありませんでした。そして、どのように行うのかを示されました。新生教会の初期には、信奉者はイエスの模範に従い、他の人々にも同様にするように教えました。

第 9 章

弟子が行うこと

驚かれるかもしれませんが、イエスは使徒たちにあまり多くを命じられませんでした。神と他者を愛するという彼のビジョンは複雑なものではありませんでした。しかし、命じられたことには深い意味があり、それを実践すると人生が変わるほどのものでした。弟子であることの最も重要なポイントから始めましょう。

弟子は神、隣人、そしてお互いを愛する

神に尽くす人生をイエスさまは次のように要約されています。最大の戒め（命令）は：

> 心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている。（マタイ 22・36-40）

イエスはこれらのことを実践されました。「わたしが父を愛していることを世が知るように、わたしは父がお命じになったとおりのことを行うのである」（ヨハネ 14・31）。イエスは彼の父である神への愛をどのように示されましたか。神に従うことでお示しになったのです。ご自身に関する神のご計画を成就されました。彼はさらに次のように言われました。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである」（ヨハネ 15・9）。イエスは、最も大切な二つの戒めについての彼のコメントが明らかにしているように、使徒にも同様にするように言いました。

イエスはご自分を例にとって、さらに踏み込んで説明されました。ご自身が使徒たちを愛したのと同様に、使徒たちもお互いを愛するようにと命じられました。使徒たちがそれを行ったとき、彼らはイエスに従い、神を喜ばせることになるのです。イエスは次のようにおっしゃいました。

> 人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わ

> たしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。（ヨハネ 15・13-17）

> . . . わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。（ヨハネ 13・34-35）

イエスによると、神への愛、およびお互いの愛は、彼の弟子の根本的かつ不可欠の印です。イエスはこれら二つの戒めを矛盾するものだとは決して考えておられませでした。それらは相反するものではなく、表裏一体でした。それらを切り離すことはできませんでした。

しかし、私たちはどのようにして人を愛するのでしょうか。その最も崇高な表現は、自分の命を捧げることです。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」（ヨハネ 15・13）イエスが私たちのために行われたのはそれです。

> 正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。（ロマ 5・7-8）

この究極的な愛の表現を除き、コリント人への第一の手紙 13・1-7 に勝る説明は思いつきません。必要なことがすべて含まれています。この箇所によると、愛の特性は次のとおりです。

- 愛は寛容である
- 愛は情深い
- 愛はねたむことをしない
- 愛は高ぶらない、誇らない
- 不作法をしない
- 愛は自分の利益を求めない
- 愛はいらだたない
- 愛は恨みをいだかない
- 愛は不義を喜ばない
- 愛は真理を喜ぶ
- 愛はすべてを忍ぶ

- 愛はすべてを信じる
- 愛はすべてを望む
- 愛はすべてを耐える

ここにリストされた特性は、バレンタインのカードやロマンチックな記念品によく書かれています。それはそれでよいのです。配偶者や、配偶者になって欲しいと持っている人を愛するべきです。しかしコリント人への第一の手紙 13・4-7 は、ロマンスについての記述ではないのです。これは私たちが通常そのようにして人々を扱うべき方法なのです。相手がそれを愛として認めるかどうかは重要ではありません。神はそれを見ておられ、承知しておられます。

これらの特性の一部は、リストに含まれる他の特性のコンテキストで解釈する必要があります。たとえば、「愛はすべてを信じる」ということには、「愛は真理を喜ぶ」ということとのバランスが必要です。「愛はすべてを信じる」ということを分離して、愛は虚偽の教えや悪意のある教えをも信じると判断することはできません。同様に、「愛はすべてを望む」も誰かに対に対する悪を望むことを指すものではありません。しかし、全般的にこのリストはわかりやすく、毎日の実践課題でもあります。

次に進む前にもう一つポイントを説明しておきます。弟子として生きることの意味において、基本的にすべては、次のイエスの第一の戒めから派生するということを認識することは非常に重要です。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう（ヨハネ 13・34-35）。お互いを愛すること、そして人々を愛することは、弟子が実践するその他すべてのこと（祈り、断食、施し、交わいなど）を方向付ける出発点です。これら他のことはすべてこの基本的な戒めの表現なのです。

弟子はお互いを大事にする

弟子訓練のこの要素は、お互いに対する愛の延長です。お互いを大事にすることとは、*人を育むコミュニティに生きる*ことです。

五旬節（使徒 2・1-4）の後、ますます多くの人が福音を受け入れるようになり、「教会」と呼ばれる拡大を続けるコミュニティ（彼らの場合はエルサレムの教会）の一員となりました。新約聖書では、これは建物や正式な組織を指す言葉ではありませんでした。新約聖書は、エルサレムの教会は貧しいことで有名であったことを語っています。集会のための建物はありませんでした（さらに、新しい信徒は数千もいたのです - 使徒 2・

41）。正式な法的地位もなかったため、信徒は迫害されていました（使徒 3・11-4・31、5・17）。

「教会」が建物や、法的地位のある組織ではなかったのなら、それは何を意味していたのでしょうか。イエスの信奉者たちは、どのようにして生計を立てていたのでしょう。自己犠牲を払う緊密なコミュニティを形成したのです。現代の教会では、あるスポーツチームのファンであることや、慈善活動の支援者仲間であることなど、共有する興味を持った人々のグループを表すためにコミュニティという言葉を使うことが多いようです。それは新約聖書のコミュニティの意味とは程遠いものです。新約聖書の教会コミュニティは、家族でした。

共通の興味のために結び付いた人々のグループと家族との違いは、多数あります。好きな野球チームが同じであるために、あなたの家賃や食料雑貨費を支払うためのお金を誰かが出してくれると思いますか。誰かがあなたと同じ候補者に投票したり、同じ 5K レースで走ったからといって、その人かがあなたに仕事をくれたり、あなたの車を修理してくれたりすると思いますか。もちろん、そんなはずはありません。しかし家族からの助けは予想できるでしょう（少なくとも、家族、つまり血縁関係とはそういうものであるはずです）。

初代教会はそういうものでした。次の箇所からその様子を垣間見ることができます。

> そこで、彼の勧めの言葉を受けいれた者たちは、バプテスマを受けたが、その日、仲間に加わったものが三千人ほどあった。そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた。みんなの者におそれの念が生じ、多くの奇跡としるしとが、使徒たちによって、次々に行われた。信者たちはみな一緒にいて、いっさいの物を共有にし、資産や持ち物を売っては、必要に応じてみんなの者に分け与えた。そして日々心を一つにして、絶えず宮もうでをなし、家ではパンをさき、よろこびと、まごころとをもって、食事を共にし、神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである。（使徒 2・41-47)

聖書のこの箇所は、共産主義や社会主義を表しているのでは*ありません*。政治システムを表しているわけでもありません。政府や国家の指示や強制などということは、この節には何も書かれていません。それはまったく自発的な行いでした。健全で正常な家族の行動を表しているのです。家族はそのメンバーのニーズを満たします。この家族はたまたま数千人で成っていたというだけです。

これは弟子の行動をうまく描写しています。コミュニティを育むのです。家族がそうであるように、お互いを愛し、支えます。これは資源を共有することを意味します。信者により、それはお金であったり、時間であったり、あるいはサービスやスキルであったりします。基本的に、コミュニティは、そのメンバーのために必要なことを行います。

そんなに多くの人が含まれているのに、コミュニティではどのようにお互いを知ることが可能なのかと思われているかもしれませんね。信者たちは、宮や「家で」集いました（使徒 2・26、5・42）。これは、当初のクリスチャンコミュニティであるエルサレムの「教会」は、小さいコミュニティのネットワークであったことを意味します。コミュニティ内の小グループが新しい信者の支援と承認の最前線だったのです。

これらのコミュニティは、新しい信者の入り口でした。クリスチャンコミュニティは、福音を受け入れた人々のコミュニティでした。各コミュニティは、そのメンバー（そしてある意味ではより広範で大きなコミュニティのメンバー）の弟子教育に従事しました。具体的にはどのようにそれが行われたのでしょうか。

通常、最初に行われたことは、新しい信者に洗礼を授けることがでした（使徒 2・41、8・12-13、10・47-48）。洗礼は、イエスおよびその信奉者たちと一体であることを示す公な行為でした（コミュニティの他のメンバーが証人となりました）。洗礼は、十字架上でイエスが成就されたことにより罪が赦されたこと、および新しい命をいただいたこと（ロマ 6・1-4、二コリ 5・17）をはじめ、いくつかのことを表していました。洗礼はコミュニティの生活に入る第一歩でした。受洗する人が、イエスに対する信仰を信認し、証人がその人の誓約を承認しました。

信者のコミュニティは集ったときにお互いのニーズを見極めました。小さなコミュニティで人々のニーズを満たすことができれば、そのようにしました。これにより、ニーズを満たす側の信者はイエスに倣うことができ、助けを得た側の信者は、イエスのように生きる生き方を「リアルタイム」で学ぶことができました。小さなコミュニティで満たせないほどニーズが大きい場合は、信者の大家族が助けました。使徒たち、つまり新生のエルサレム教会のリーダーであったイエスの当初の弟子たちは、ヘルパー（「執事」）を指名し、コミュニティ全体の「日々の配給」を組織しました（使徒 6・1-7）。

このことに関する初代教会の慣習の一つは、「主の晩餐」（一コリ 11:17・34）を覚えて祝宴を行うことでした。「主の晩餐」は、イエスがその体と血がまもなく彼らにささげられることを弟子たちに告げた最後の晩餐を記念する祝いでした。イエスは、ご自分の命をささげることは、「新しい契約」（ルカ 22・20）の成就であることを告げられました。主の晩餐での祝宴についての記述でも同じことが記されています（一コリ 11・25）。主の晩餐は、イエスが行われたことを記憶する一方法でした。イエスは、

「わたしを記念するため」そのように行うように指示されました（一コリ 11・24-25）。それは、コミュニティ内の貧困者が保護されるようにするための一方法でもありました。

弟子たちの交わり

「交わり」とは新約聖書の言葉で、信仰によるコミュニティの活動を表現したものです。お互いの面倒を見ることは、聖書で言う交わりの一環でした。信者が集ったときにそれぞれのニーズを把握して満たすことができるからです。とは言え、弟子が行うその他のことについて語るには、交わりについて簡単にお話しする必要があります。

今日のクリスチャンの多くは、一緒に楽しむことと「交わり」を同一視しています。楽しいことを一緒に行うことで、関係が強化されるのは確かです。親交を楽しむことにより、絆が築かれます。しかし、弟子になるという意味では、それは聖書で言う真の交わりではありません。

楽しいことを一緒にすることと聖書における交わりとの基本的な差は、交わりはただ一緒に時間を過ごすことではないことです。それよりもはるかに意図的なものです。

交わりの目的は、「イエスにあっていだいているのと同じ思い」を持つことができるように、最終的にイエスを中心に「一つ心に」なることです。言い換えると、交わりの目的は弟子訓練です。ピリピ人への手紙の次の節にこの観念が表されています。

> ただ、あなたがたはキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そして、わたしが行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたが一つの霊によって堅く立ち、一つ心になって福音の信仰のために力を合わせて戦い（ピリ 1・27）...
>
> そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。. . . キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。（ピリ 2・1-2、5）

キリストの思いを持ち、そして信者のコミュニティとして同じ思いとなることは何を意味するのでしょうか。全員が、最後の詳細まで同じことを信じるということでしょうか。そうではありません。聖書が語っているのは、均一性ではなく結束です。「同じ思いを持つ」ことを理解するためには、そのコミュニティの各メンバーが同じ目的、つまりイエスのようになることを目指しているという説明が効果的です。キリストに似たものと

なることを目指してコミュニティに生きることにおける目標は、意見の完全な一致ではなく、調和です。

信仰による初期のコミュニティは、この目的を果たすためにいくつもの活動を行っていました。祈り、断食、礼拝、そして聖書研究などを行いました。これらの活動はすべて、弟子が各自で、そして一緒に行う活動であるため、それぞれについて説明していきます。

弟子は祈る

単純に言うと、祈りとは神に話しかけることです。このことについてはいくらか考える必要があります。神は既に私たちが考えていることをご存知なのではないですか。そうです。ではなぜ祈るのでしょう。祈りは、神に情報を伝えるためのものではありません。祈りは、私たちが神および（他人）に依存していることを示す一方法なのです。神に行動してほしいということ、自分に頼っていないこと、または自分で解決策を見つけられないといったことを表現する方法です。祈りは、神のみに対する依存感および安心感を育みます。その意味で、祈りは礼拝であると言えます。グループでの祈りについても同じことが言えます。

ルカによる福音書 11・1 では、弟子たち（バプテスマのヨハネとその信奉者）がイエスに「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」とお願いしました。イエスは、今では有名な「主の祈り」（ルカ 11・2-4、マタイ 6・9-15）でそれに答えられました。主の祈りでは、イエスは弟子たちにどのような言葉を使って祈るのかを教えておられないことに注意することが重要です。代わりに、「こう祈りなさい」（マタイ 6・9）とおっしゃいました。彼は模範を示しておられたのです。神に話すのに定型句や特殊な言葉は要りません。*ただ神に話すのです*。また、祈りは人に見せるために行ってはなりません（ルカ 18・9-14）。

主の祈りには、神がまだご存知でないことは何も含まれていません。もう一度言いますが、祈りは神の知識のギャップを埋めるためのものではありません。むしろ、主の祈りには、神への礼拝と敬意（「御名があがめられますように」）、神の御子への従順（「みこころが . . . 行われますように」）、誘惑と悪からの救出のお願い（「試みに会わせないで、悪しき者からお救いください」）などが織り交ぜられています。祈りは、私たちの人生の主である神に私たちの心を合わせ、彼への依存の態度を育むためにデザインされたものです。

聖書は、個人および集団の両方の祈りで満ちています。それらの祈りを読んでいくと、祈りは怒り、悲しみ、愛など、私たちの感情を神に吐露する手段でもあることがわかります。神は善でありすべてをご存知であると信じ、神に助けを求め、神に従うことを学

びます。イエスは、神はその賢明な御心の広い視点からお答えくださるとおっしゃっています。言い換えると、神の答えは必ずしも私たちが望んだ答えではないこともありますが、神は人間のすべての経験および行動の中で起こっているすべてのことをご存知で、神の偉大なご計画の成就に向けて働いておられるのです。また、予想外の方法でお答えになることもあります。

さらに、聖書に含まれる祈りは自己中心的ではありません。それらの内容のほとんどは、他人を祝福することや、他人への神の憐みを願うことを目的としています。パウロの手紙には、相手に対する祈りが習慣的に含まれていました。祈りは、必ずしも（たいていの場合）私たち自身のニーズや望みを表現するためのものではありません。

イエスは頻繁に祈られました。祈りは持続する必要があるというご自身の教えに従われました（コロ 4・2-6、ルカ 18・1-8）。イエスの祈りがすべて聞かれたわけではありません。彼はそれを受け入れられました。彼にとっては神の御心が成されることの方が大事であったためです（マタイ 26・36-46）。これは祈りに関する重要なことです。イエスは、私たちが祈ると神が答えてくださる（ルカ 11・9-13）と教えましたが、私たちが神に従っていない場合や、御心と協調していない場合は、神が私たちの望みどおりに答えてくださるだろうと推測することはできません。

弟子は断食する

読者の多くは断食についてあまりご存知ないかもしれません。一般に、何かから「断食」すること（何かを断つこと）とは、それを*避ける*ことを意味します。食べ物からの「断食」は、食べ物をとらずにいることを意味します。聖書で最もよく見られるのは、この種の断食です。イエスは断食されました（マタイ 4・2）。弟子たちが彼の模範に従うものと想定し、断食を行うときには偽善者のようであってはならないと警告されました（マタイ 6・16-18）。断食は、自分に注意を引くためのものではありません。あなたと神との間でのことです。

断食は、単に食べ物を避けるだけではありません。あらゆることから、自分の方法で断食することができます。イエスは、痩せるための戦略を提言されていたのではありません。彼は断食のとき、および断食について語るとき、何か別のことを念頭に置いておられました。聖書には断食の例は多数含まれていますが、特別な規則はありません。パウロは、夫婦は祈に専心するために性交を断つこともある（一コリ 7・1-5）と言及しています。

なぜでしょう。夫婦がしばらくの間性向を避けることに合意することについて書かれたコリント人への第一の手紙 7・5 のパウロの言葉は、その理由を示唆しています。「互

に拒んではいけない。ただし、合意の上で祈に専心するために、しばらく相別れ、それからまた一緒になることは、さしつかえない。」断食は、祈りに集中するための霊的行為です。断食によってそれはどのように実現されるのでしょうか。例を挙げるとわかりやすいでしょう。食べ物を 1 日絶つことにした場合、空腹になると祈ることを思い出します。断食は注意を喚起し、断食の理由へとあなたの注意を向けます。

また、断食について考えるもう一つのアプローチは、祈りから、あるいはより広い意味で神とともに歩むことから私たちの注意をそらすものは何かを考えることです。答えとして電話、テレビ、趣味などが考えられます。これらはすべて、私たちの心と祈りを神へ戻すために、しばらくの間脇に置いておく（絶つ）ことができます。

初期の教会コミュニティは、集団で祈りに集中するために断食しました（使徒 13・1-3、14・23）。旧約聖書では、集団での断食は、罪に対する集団の悲しみと悔い改めを示す一方法でもありました。

弟子は礼拝する

礼拝は定義または理解が簡単だと思っておられるかもしれません。そうではありません。私たちも、礼拝を教会の礼拝サービスで起こること、主に音楽と同一視することが多すぎます。それは、音楽と歌はクリスチャンの集いの一部ですが、少なくとも聖書の定義では、礼拝ではありません（エペ 5・19、コロ 3・16）。私たちの文化のもう一つの傾向は、内部志向の神秘的な感情または経験として礼拝を捉えることです。それも礼拝ではありません。このことに関する節は多数ありますが、二つの箇所を見てみましょう。

> 兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。（ロマ 12・1-2）

> イエスはサマリアの女に次のように言われました。「そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。」（ヨハネ 4・23）

最初の例については、既に聖なる人生を生きることについての考察で説明しました。どのようにして神を礼拝するのでしょうか。イエスのように生きるのです。この世（その価値観および自己の欲求の満足の追求）と妥協してはなりません。それが礼拝です。そのため、真の礼拝は心の問題です。

二つ目の例は、特別な理由で興味深いものです。イエスは、神は人々が彼を礼拝することを望んでおられると女に語られました。ですから、礼拝は私たちから始まるものではありません。私たちは神の善と愛に答えるように*招かれ*ているのです。その*方法*と*場所*はさまざまです。それは、個人で、音楽なしに、教会の礼拝サービスの外で行うことができます。また、他の信者との交わりの中で、集団で行うこともできます。

集い交わるとき、信者は「愛と善行とを励むように互に努め」ます（ヘブ 10・24-25）。つまり、相互にイエスを模倣して霊的礼拝を促します。自分たちの人生における神の善、愛、摂理的な存在について神を賛美します（使徒 2・46-47）。賛美には、歌や音楽も含まれますが（マタイ 26・30、エペ 5・19、コロ 3・16）、それが聖なる生き方「. . . 何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るように」（ピリ 1・10-11）につながっていることには疑いの余地がありません。

本質的に神の「霊的な礼拝」が私たちの生き方に関係するという事実を見失うわけにはいきません（ロマ 12・1-2）。家庭や教会での 30 分ほどの経験ではないのです。神によって方向づけられ、神に向けられた人生なのです。

弟子は罪を告白し神の赦しを受け入れる

イエスに従う人生の旅路が始まると同時に、弟子が理解し始めなければならないことの一つは、彼らは失敗するということです。イエスのように罪のない人は誰もいません（二コリ 5・21、一ペト 2・21-22、一ヨハ 3・5）。またはそうなることも期待できません。聖書は、この点について明確です。弟子たちも罪を犯しました（マルコ 14・30、68、72）。その一人、ヨハネは後に次のように書いています。

> しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない。もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない。（一ヨハ 1・1-10）

神の家族におけるメンバーシップは私たちの功績によらないということは素晴らしいことです。私たちの善行により神に恩を売ることはできません。神が私たちに功徳がある

と思われたからといって、永遠の命を私たちに下さる義務はありません。私たちの功績（あるいは功績のなさ）によって、神の心が変わることはないのです。神は私たちが「まだ罪人であった時」（ロマ 5・8）から私たちを愛しておられました。道徳的に完璧であることによって救いを獲得することはできないのですから、道徳的な欠陥によってそれを失うこともできないということを覚えておく必要があります。

私たちの不完全性（欠陥）を踏まえ、イエスの真の弟子は神の親切と愛に集中する必要があります。ヨハネの手紙からの節をもう一度見てください。イエスに倣うことと矛盾することを行ったり、イエスのようであることと合致する行いを怠ったりすることにより、神の期待を裏切ってしまったとき、どうすればよいかが書かれています。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」

罪を犯し失敗したときは、それを認めなければなりません。それが告白の意味するところです。罪を隠したり、言い訳を言ったり、正当化してはなりません。神は私たちがそれを認めることを望んでおられます。なぜだと思いますか。私たちは謙遜でなければなりません。救いは、自分以外の方（つまりイエス）が行われたことであり、私たちが獲得するものではないということを覚えておく必要があります。告白は、私たちがイエスのお陰で神の子たちとなったことを認めます。私たちの罪によって神から引き離されることはないということ（ロマ 8・31-39）、家族から追い出されることはないということを確認できます。福音を受け入れる前から私たちに欠陥があったことを神は承知しておられました。神が驚かれるようなことではありません。私たちに対する神の気持ちを変えるものでもありません。

では、明らかな質問ですが、私たちは罪を犯すことをなぜ心配しなければならないのでしょうか。新約聖書における弟子たちは、人々の中でこのような態度に遭遇しました。使徒パウロは、ローマのクリスチャンへの手紙でそのことを書いています。

> では、わたしたちは、なんと言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであろうか。断じてそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか。. . . だから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従わせることをせず、また、あなたがたの肢体を不義の武器として罪にささげてはならない。むしろ、死人の中から生かされた者として、自分自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい。なぜなら、あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵みの下にあるので、罪に支配されることはないからである。それでは、どうなのか。律法の下にではなく、恵みの下にあるからといって、わたしたちは罪を犯すべきであ

ろうか。断じてそうではない。あなたがたは知らないのか。あなたがた自身が、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であって、死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕ともなるのである。（ロマ 6・1-2、12-16）

聖書は「とんでもない。罪を犯すな。罪を犯すと神はあなたを愛してくれなくなる」とは言っていません。むしろ、懸念されたのは自己破壊に囚われた状態に戻ることでした。ですから、私たちは罪を犯しますが、罪は避けるべきなのです。この苦悩はパウロもよく知っていたことです（ロマ 7・7-25）が、彼はイエスのすばらしい信奉者でした。新約聖書は、私たちの心の中で戦いが行われていることを何度も警告しています。私たちの心がイエスに従うことを望んでいるにも関わらず、不完全な自己は自己の満足と優位性を望むのです（一ペト 2・11、ヤコ 4・1）。

私たちはイエスに従うことに努める中で、「神との交わりを 持ち続け」ましょう。失敗したら、すばやく告白して神の赦しに感謝しましょう。私たちの罪のためにイエスが支払った代償を覚えておく必要があります。私たちがまだ「罪人であった時」（ロマ 5・8）にイエスが十字架にかかられ、私たちが彼の兄弟姉妹になることを可能にしてくださったことに感謝し、忠実な愛をもってイエスに従っていくべきです。

弟子は聖書を勉強する

初代教会では、信者は使徒の教えに耳を傾け、聖書を勉強していました。パウロとその他の宣教師/使徒たちはは、別の土地で教会を開始したときも、同様のことを行いました（使徒 2・42．4・2、5・42、17・10-11、18・11、20・20）。新約聖書の時代には、ほとんどの人が自分自身の聖書のコピーを持っていなかったため、教えを聴くことが聖書を学ぶために一般的な方法でした。また、信者の多くは読むことができませんでした。私たちは読み書きのできる文化に属し、聖書へのアクセスもありますが、コミュニティで学ぶことから恩恵を受けることもできます。

神の御言葉を学ぶことは、イエスに従うために不可欠です。罪（避けるべき行動や態度）について、そして霊に満たされた生き方（望ましい振る舞い）について、それ以外の方法で学ぶことはできません。聖書は、「あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである」（エペ 4・22-24）と教えています。 福音への信仰により神の家族の一員になると、霊が内在し（一コリ 3・16-17、6・19-20、二コリ 6・16、エペ 2・22）実りの多い人生を送るために助けてくれます。

> もしあなたがたが御霊に導かれるなら、律法の下にはいない。肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言っておく。このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない。しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである。（ガラ 5・18-24）

弟子は神の御言葉を学び、それを生きます。イエスは神の御心に従うことで、神への愛を示されました。コミュニティはそのために大きな助けとなります。コミュニティでは、イエスに何年も従ってきた成熟した信者と触れ合います。彼らが「古き人を脱ぎ新しき人を着る」ことを学ぶ中で、彼らの人生がどのように変わったかを学ぶことができます。イエスのようにになることを追求して苦闘するとき、彼らから励ましを得ることができます。彼らは神の愛と赦しを思い出させてくれるでしょう。クリスチャンは誰でも罪から離れて正しいことを行うために苦闘するものなので、彼らはあなたの苦闘をよくわかってくれるでしょう（一ヨハ 1・5-10）。使徒でさえも罪と苦闘し、正しい行いをすることに苦戦していました（ロマ 7・7-25、ガラ 2・11-14）。私たちがイエスに似たものになるように努力するうえで、コミュニティは、説明責任、共感、そして励ましを意味します。

弟子は苦しむ

この要素には驚きを感じるかもしれませんが、新約聖書では明らかです。イエスは弟子たちに次のようにおっしゃいました。

> もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい。もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではない。かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だから、この世はあなたがたを憎むのである。わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。（ヨハネ 15・18-20）

信仰による忠誠が試されるのはこういうところです。生き方について心が変えられる必要があると学ぶことと、イエスに従いそのために苦しむこととはまったく異なります。使徒はイエスに従うことにより、苦難を経験しました（使徒 5・41、9・16、21・13、

二コリ 11・22-29）。信仰を持ち続けることは、新約聖書を通してのテーマです（ロマ 8・17-18、二コリ 1・3-7、ピリ 1・27-30、一ペト 3・13-17）。当初の十二使徒の一人であるペテロは、イエスがその信仰のために苦難に遭い投獄されたのを見ました。彼は、迫害によって故郷を追われ散り散りになった信者に次のように書き送りました。

> 悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。（一ペト 2・20-23）

苦しみに耐えるには、福音が約束しているのは楽な人生ではなく、来る人生で神の家族における永遠の場所であることを覚えておく必要があります。この世は私たちの本当の住処ではありません。

弟子はさらに弟子を作る

神、隣人、そしてお互いを愛することは弟子として生きるうえで最も重要ですが、弟子は他の弟子を作ります。これはイエスが昇天の直前に信奉者たちにお与えになった任務です。そのため、それは神の大宣教命令と呼ばれています。

> イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。（マタイ 28・18-20）

「すべての国民を弟子として」は、聖書の物語の大きな部分を占めました。諸国を虜にしていた超自然世界の権力の権威は、取り去られました。神はパートナー、すなわち御子イエスの弟子である神の子たちがあらゆるところで福音の良い知らせを伝えることを望んでおられます。神は可能なかぎり多くの人々をその家族に加えたいと願っておられます。私たちの任務は、良い知らせを伝えるだけでなく、それを生きることで、彼らを神の家族に迎え、彼らにもそれと同じようにするように教えることです。

それはどのようにして行うのでしょうか。私たちの信仰を、そして福音を信じるに至った経緯を共有するのです。驚くほど単純なことです。

まず、信じてイエスを通した神の赦しを受け入れる前のあなたの人生について人々に語ります。人々は物語、特に他人についての話が好きです。なぜでしょう。人間の物語には、私たち固有の物語とつながる何かが必ずあります。福音を理解する前のあなたの人生について誰かに語るとき、あなたの人生の一部の詳細は相手にも親しみのあるものであることがあり、あなたの話に含まれる多くがその相手の気持ちとつながる可能性があります。

次に、福音を聴き信じたことが、あなたにとって岐路となったのはなぜかを相手に伝えます。通常、これは私たちの赦しと関連しています。私たちが自分に対して、そして他人に対してしたことにかかわらず、神は依然として私たちを愛し、私たちをお望みであるために、救いの手を差し伸べておられるということは、素晴らしいことです。その後、私たちが赦され、永遠の命を持てるように（これは神が初めから希望しておられたことです）、神がイエスを送られた話をします。

三番目に、福音を信じ、赦されたことがあなたの人生に与えた影響について伝えます。神の赦し、愛、そして永遠の命の約束を知るということがどのようなものなのかを語ります。あなたが誰であり、なぜここにいるかについて、あなたの観点がどのように変わったかを話してください。福音を受け入れることで、あなたはどう変わったのかを伝えます。

心が変えられた証拠を見たいという人もいるかもしれません。それは普通のことであり、イエスを模倣するチャンスです。これが聖なる人生を生きる重要な理由の一つです。イエスは人々を愛し、彼らに仕えました。人は愛されることを望み、他の人々に信頼性を求めます。人々にイエスのように対応することには説得力があります。彼らは気付くでしょう。彼らには誰かに愛されているかいないかがわかります。福音のメッセージのためにあなたが自分より彼らを優先すると、彼らはそれに気付くものです。誰もがイエスを信じたわけではありません。あなたが福音を伝え、イエスがされるのと同様に人々に対応しても、誰もがそれを信じるわけではありません。しかし、信じる人も多くいることでしょう。

重要な名前と用語（用語集）

- このリストには本書の本文中で説明されている用語は含まれていません。

アブラハム - イスラエル人またはユダヤ人として知られるようになる人々の祖先として神によって選ばれた男性。

使徒行伝 - 新約聖書の書のひとつであり、初期のクリスチャンの歴史が書き記されている。

アダムとエバ - 神が創造された最初の二人の人間（男と女）。

御使い - 神に仕えイエスの信者を補助する超自然的存在。英語の聖書では「angel（天使）」と訳されている元のヘブライ語とギリシャ語の用語は「メッセージャー」を意味する。従って「御使い」（angel）という用語は職務内容であり、神の天界のメンバーの神からのメッセージを人々に伝えるという役割を説明している。詳細については用語集の後の「超自然界に関する用語のサマリー」を参照のこと。

使徒 - 「遣わされた者」を意味するギリシャ語の用語。新約聖書にはさまざまな種類の使徒が含まれている。

昇天 - 復活後のイエスの天国への帰還。

アッシリア人 - メソポタミアに居住した、イスラエル人の歴史的な敵。

バベル - 南部メソポタミア（今日のイラク）に位置したバビロンの古代都市。

バビロニア人 - 南部メソポタミアに居住した、イスラエル人の歴史的な敵。

信者 - 福音を受け入れた、または信仰により福音に信頼を置く人。

聖書 - 神の神意によって導かれた人たちによって書かれた 66 の聖なる書を集めたもの。最初の 39 の書は旧約聖書として知られ、新約聖書と呼ばれる 27 の書がその後に続く。

キリスト - 「油を注がれた者」と意味するギリシャ語で、イエスの称号の一つ「メシア」と同等である。

契約 - 二人の当事者間の合意。聖書では神が人間と契約を結ばれ、彼らに約束と恵みを与えておられる。契約は条件付きの場合も条件なしの場合もある。

十字架 - イエスの処刑の手段。ローマの十字架は、地面に垂直に立った柱に横竿を組んだもので、犠牲者は拷問の後、それに縛り付けまたは釘付けにされ、窒息するまで放置された。新約聖書では、罪の代償が支払われた場所、および福音を信じるすべての人々のために確保された救いを指す場合にも、「十字架」という言葉が使われている。

ダビデ - イスラエルの二代目の王で、神から永遠の王朝を約束された。メシアは、この王家の血筋から現れることになる。

邪悪/堕落 - 悪と罪に関連する用語だが、邪念や邪悪のある行動の程度と頻繁さを指すことが多い。

悪魔 - サタンとへびの別名。詳細については用語集の後の「超自然界に関する用語のサマリー」を参照のこと。

弟子 - 名詞としては、イエスの生き方を模倣し、その教えに従うイエスの信奉者。動詞（弟子訓練する）としては、イエスに従うように他者に教えること。

伝道 - さまざまな手段によって福音のメッセージを広める活動。

出エジプト - 1）聖書の 2 番目の書の名前。2）古代イスラエルの民のエジプトでの奴隷生活からの脱出を示す用語。

悪 - 神とその被造物対して、道徳上または倫理上悪い、有害、およびを侮辱的であると神が見なされること。

信仰 -（誰かまたは何かへの）信仰による信頼。

堕落 - エデンにおけるアダムとイブの罪およびその後の影響。

赦し（罪の） - 神に対する侮辱および悪事から神によって赦免されること。神から赦されると、神からの罰は取り消される。これに関連する概念として、恵み、憐み、および救いがある。

エデンの園 - 神が最初に創造された世界における場所で、アダムとイブが住んでいた。エデンには神もおられた。

創世記 - 聖書の最初の書。

異邦人 - イスラエル民族に属さない人を指す用語（「非イスラエル人」など）。

神 - 聖書（英語）では、この用語は単数形で最初の文字が大文字になっている。すべてを創造され、人間を愛しておられる唯一、究極、無比の超自然的存在を指す。

神格 - 三位一体。唯一の無比の神の三つの人格（父、御子、聖霊）。

福音 - イエス・キリストを通した救いのメッセージ。

恵み - 私たちが値しないものを神が下さること。神の親切。

大宣教命令 - 世界中に福音を広め、弟子を作るようにイエスによってその信奉者に与えられた使命。

ヘブライ人/語 - 1）「イスラエル人」を表す別の用語、2）旧約聖書の原語。

聖霊 - 神ご自身の霊で、本質的に神と同等。

イサク - サラが生んだアブラハムの息子。

イスラエル - 1）アブラハムの孫であるヤコブの新しい名前、2）アブラハムとサラを通して神が創始された旧約聖書の国家。

イスラエル人 - アブラハムの血筋のメンバーであるとともに、イスラエル国家に属する人々。

ヤコブ - イサクの息子、従ってアブラハムの孫。その名前は後に「イスラエル」に変更された。

イエス - 神の御子。処女マリアに生まれたが、完全に神でもあった。罪からの人類の救いのための神のご計画を実行に移すために、神はイエスとして人間になられた。

ユダヤ人 - 「イスラエル人」の別名で、アブラハムの子孫たち。古代には、捕囚、追放されたイスラエル人の残り二部族に対して外国人がこのように呼んでいた。

神の御国/キリスト/イエス - キリストを通して信者と共に行う神の支配。新約聖書では、この御国を現在進行中のものだが究極的な成就を待つものとして示されている。

あわれみ - 私たちに相当する裁きを神が差し控えること。

メシア - ヘブル語の用語で、「油を注がれた者」を意味する。ダビデの血筋からの究極的な王を指す。この王が罪からの救いと、敵からの神の民の解放をもたらす。聖書の物語では、イエスがメシアであった。ギリシャ語でこのヘブライ語に相当する用語は「キリスト」である。したがって「イエス・キリスト」は、「メシアであるイエス」である。

モーセ - エジプトでのイスラエルの奴隷生活中に生まれたイスラエル人で、その束縛からのイスラエルの脱出を主導するリーダーとして神が選んだ人物。

シナイ山 - エジプトからイスラエル人を解放するために神がモーセを召された山、およびイスラエルに神が十戒を授けた場所。

新約聖書 - 旧約聖書に続く 27 の書。それらの内容は、イエスの人生とミニストリー、初期のクリスチャンの歴史、および一世紀におけるキリスト教の普及に関する。

ノア - 大洪水のとき、神が義と見なした人物。神は、大洪水から自分自身、家族、そして動物を救うために箱舟（大きな船）を構築するようにノアに指示された。

旧約聖書 - 聖書の最初の 39 の書。その内容には、イエスの誕生の前のことが年代順に記されている。

パウロ - イエスの使徒のひとりで、そのミニストリーは異邦人（非イスラエル人）に集中した。

ペテロ - イエスの最初の十二使徒の一人。

約束の地 - 地理的なイスラエルに適用される用語で、神が、その子孫が定住する場所としてアブラハムに約束された地。旧約聖書では、この地はイスラエルが占領する前はカナンと呼ばれていた。

暗闇の権力 - 神の世界および家族に対するご計画の敵対するすべての超自然的存在。詳細については用語集の後の「超自然界に関する用語のサマリー」を参照のこと。

復活 - 1）一般的に、死後の新しい命による死の征服、2）新約聖書ではイエスが十字架で磔刑されてから 3 日後に身体的によみがえられた事実、または新しい地上での永遠の命への信者の復活を指す。

救い - 罪により神から遠ざかった状態からの信者の解放。救いにおいて、私たちの罪は福音のメッセージを信じることで赦される。救いにより、信者は神の家族に戻ることができる。

サラ - 神が超自然的に子供を宿させたアブラハムの妻。

サタン - エデンでアダムとエバをだましたへびに神が与えられた名前。サタンは、神の被造物で最初に神に反逆した超自然的存在であった。新約聖書では、サタンは神の宿敵である。詳細については用語集の後の「超自然界に関する用語のサマリー」を参照のこと。

サウル - イスラエルの一代目の王。

へび - エデンの園でのアダムとエバの敵。聖書は、後にこのへびを悪魔およびサタンと呼んでいる。詳細については用語集の後の「超自然界に関する用語のサマリー」を参照のこと。

罪 - 神の義、道徳、および倫理の標準に反逆または相反するあらゆる行為または気質。

ソロモン - ダビデの息子のひとり。ソロモンはダビデの死と同時に王座を継承した。

御子 - 聖書では、人間イエスになられた「御子」は三位一体の第二の人格である。

神の子たち - 旧約聖書では、神に仕える超自然的存在、または神に反逆した超自然的存在。詳細については用語集の後の「超自然界に関する用語のサマリー」を参照のこと。

神の霊 - 聖霊の別の呼び方。

霊的戦い - 罪、および大宣教命令の活動に反対する超自然的な権力に対する苦闘。詳細については用語集の後の「超自然界に関する用語のサマリー」を参照のこと。

超自然的 - 自然界（物理界、物質界）よび宇宙を超える、またはその外のことを指す用語。「超自然的存在」は、本質的に肉体から遊離された霊的存在を指す。

十戒 - 出エジプトの後、神によって与えられた最初の十の道徳律。

三位一体 - 神格の三つの人格。神はただひとりの神であるが、三つの人格として永遠に存在するという聖書の教義。

超自然界に関する用語のサマリー

聖書では、霊界に住む存在を表すためにさまざまな用語が使用されています。クリスチャンの慣習では、それらの用語を混合することがよくあり、混乱をもたらしています。私は自分の学問的仕事の多くをそれらにつぎ込んでいますが、御使い、サタン、悪霊などの主題に関心のある方は、以下を（ここに挙げた順序で）お読みください。

- *Supernatural: What the Bible Teaches About the Unseen World and Why it Matters*（*邦題：『聖書が語る見えない世界 ー それが重要な理由』*）
- *The Unseen Realm: Recovering the Supernatural Worldview of the Bible*
- *Angels: What the Bible Really Says About God's Heavenly Host*
- *Demons: What the Bible Really Says About the Powers of Darkness*

最初にリストされている著書は、本書と同様に、学問的考察を目的としていません。他の 3 冊は、本質的に学問的です（多数の脚注や詳細が含まれています）。これらの著書には、内容を裏付けるために、学術的リソースからの記録や参照が数千含まれます。

差し当たり、本書で提示した聖書の物語で参照された超自然界について復習するかまとめるといいと思います。

聖書は、目に見えない世界、すなわち霊的存在の世界があると教えています。これらの存在は、物理的な形態をとることはできますが、本質的に肉体を持ちません。霊界は「超自然的」です。物理界、そして自然界と物理界を超えた、異なる本質を持つ世界です。

神は霊界のメンバーですが、その創造主としてそれよりも上（優れた）存在です。創造されていない永遠の存在は神のみです。私たちの既知の世界（物理界、物質界）のすべての命が神によって創造されたのと同様に、霊界に住む他の霊的存在すべては神によって創造されました。

聖書では、霊界のメンバーはさまざまな用語で表現されています（ロマ 8・38、一ペト 3・22）。本書ではそれらのいくつかを紹介しました。これらの用語の一部は、仕事の内容、つまり霊的存在の活動を表現したものです。「御使い」はその例です。この用語は「メッセージャー」を意味します。そのため、新約聖書のグレコローマン文化では、「御使い」は神に反逆していない天軍のメンバーを示す用語となりました。「悪霊」という用語は、古代の世界ではさまざまな意味があったにもかかわらず、反逆した者たちすべてのラベルとなりました。

「神の子たち」という記述的なフレーズは、神が霊的存在の父（創造主）であることを示す家族関連の用語です。ただしこの用語はそれ以上のことを意味します。このフレーズについては、拙著『超自然の世界』と『*Unseen Realm*』で詳しく説明しています。「神の子たち」は、神の「労働力」における上位の存在を指しています。古代の世界で王の子たちが重要な責任を担う高い地位を与えられたことに関連して用いられる用語に基づいています。聖書の物語では、

「神の子たち」は神がバベルで裁かれた諸国の統治を任せられました。これは、単にメッセージを伝えること（御使いの任務）よりも重要な仕事でした。

当初は、霊界の全メンバーが神に忠実でした。その状態は続きませんでした。本書でお読みになったように、神は霊界のメンバーたちを創造されたとき彼らとその資質を共有されました。それらの資質の一つは自由意志でした。霊界の一部のメンバーはその自由を行使し、神の御心と神の人間の家族に対して反逆したのです。神とその民に対して反逆している霊的存在は総称して「暗闇の権力」です。それにもかかわらず、聖書は、人間の家族を持つという神の願いの物語の中で、神の霊的な敵を区別しています。

聖書はそのような反逆を三つ書き記しています。最初の反逆はエデンの園で起こりました。霊界のメンバーの一人が、人間の家族を持つという神の願いを攻撃しようとしたのです。聖書の物語では、その存在がへびとしてエバに近づき、彼女を騙しました。後に「サタン」（「敵対者」を意味する用語）や「悪魔」（「中傷者」を意味する用語）などの聖書でのラベルは、この最初の反逆者の名前となりました。

聖書の物語では、後に天上の神の子たちも反逆しました。彼らは霊界と物理界の境界線を破りました。ユダの手紙という短い書では彼らの罪を「自分たちの地位を守ろうとはせず」と表現しています。旧約聖書では創世記 6・1-4 の反逆者について、「御使い」または「悪霊」を全く使っていないという事実にもかかわらず、教会の慣習では、これらの反逆的な神の子たちを聖なる者からの彼らの「堕落」を表す「堕落した御使い」、または、その邪悪を示す「悪霊」という（不正確な）言葉で呼ぶようになりました。

最後に、バベルの塔での出来事の後に諸国を任された「神の子たち」は、その任務遂行のどこかの時点で墜落し、腐敗しました。詩篇 82 はその彼らの裁きについて書かれています。これらの領域的存在とは、ダニエル書 10 章に記載された諸国に関係する超自然的な「君」に加えて、さまざまな節でパウロが書いている「支配」、「支配者」、「権威」、「位」、「権力」の基盤でもあります。これらの用語はすべて、地理的な統治に関するものであるため、聖書の物語でバベルの後に出現した状況を説明するために適した用語です。